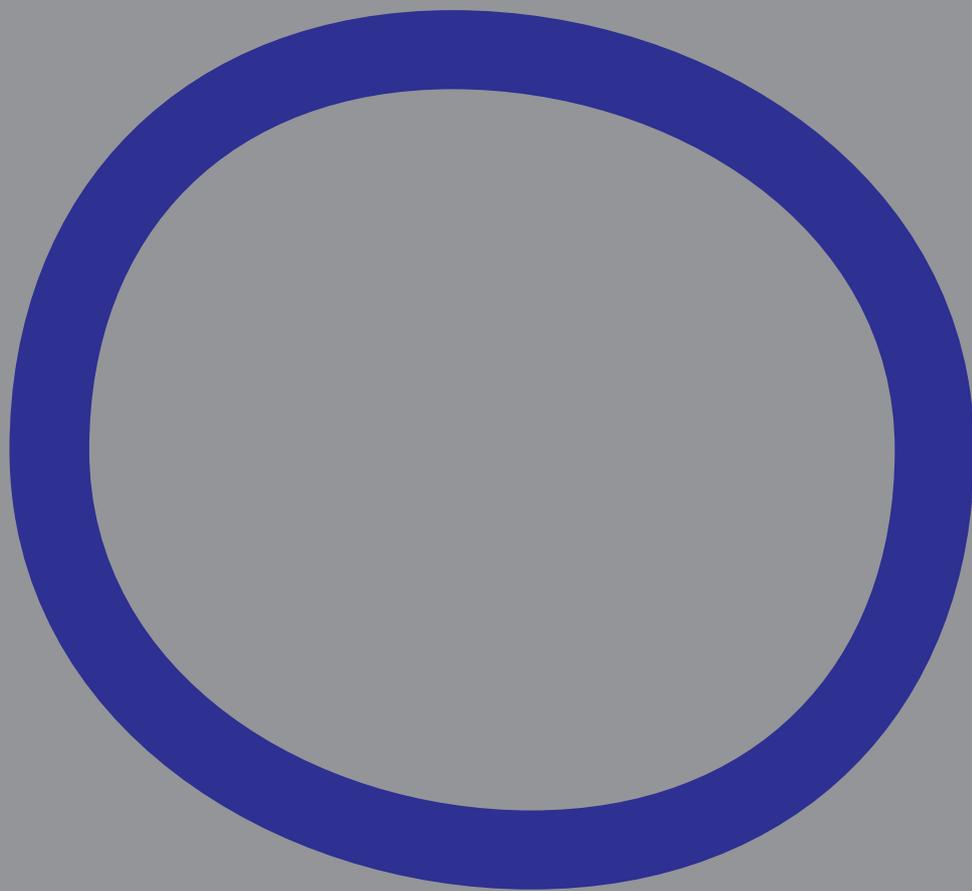
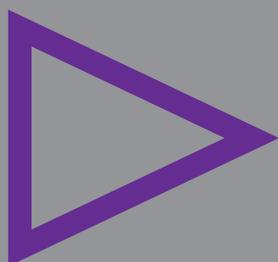
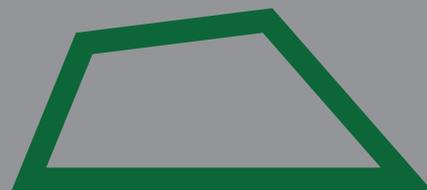


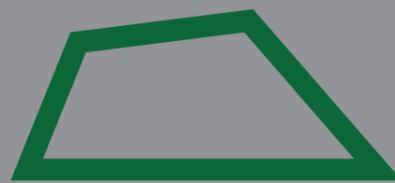
東京スロープとブラケット紀行



お迎えの時間



お迎えの時



対談紀行2016紫陽花篇 …………… 6

はじめに

「とむらい」の映像を二本見る

安藤仁美×羊屋白玉

江古田のガラクタやネバーランド店主、安藤さん

もうひとつの顔、小説家

誰かのが、次の誰かに渡ってゆく場所

ガラクタやネバーランドの様子

医療関係の学校を経て、古物の業界へ

江古田で商いを始めて3年目

市場が幕を閉じて

動き出したガラクタやネバーランド

街を見てる

小山田徹×羊屋白玉

デンマークの古着屋さんのズボン

「繕う」

ニューヨークの本屋さんの書棚

焚き火の魅力をロジカルに語ってください

焚き火を囲むと自己紹介などいらない

焚き火を失った今。でも、何を得たんでしょう

東京スープとブランケット紀行は、個人の記憶の蓄積がベースにある

小山田さんが手掛ける焚き火の今

江古田スープについて。小山田ごはんについて

ご近所さんの許容量

「繕う」ふたたび

小山田徹×羊屋白玉×安藤仁美

2017年大寒放談 小山田徹氏を迎えて …… 50

おわりに …………… 82

「東京スープとブランケット紀行」とは …………… 83

対談紀行2016年紫陽花篇



小山田徹さんと安藤仁美さん

対談紀行2016年紫陽花篇

2016年6月12日、アーツ千代田3331にて。

江古田にあるお店「ガラクタやネバーランド」の店主・安藤仁美さんと、江古田の外から京都にお住まいの美術家・小山田徹さんをお迎えして「対談紀行2016年紫陽花篇」を開催しました。今回はその対談の様様を記録写真とともにお伝えします。



ホスト

羊屋白玉 ひつじやしろたま

1967年北海道生まれ。明治大学中途退学。「指輪ホテル」芸術監督。東京スープとブランケット紀行ディレクター。劇作家、演出家、俳優。代表的な作品は、2001年ニューヨークでの同時多発テロの直後、ニューヨークと東京をブロードバンドで繋ぎ、同時上演した「Long Distance Love」。2006年北米ヨーロッパをツアーした「Candies」。2012年ブラジル4都市をツアーした「洪水」。2013年瀬戸内国際芸術祭では海で、2014年中房総国際芸術祭では鉄道で上演した「あんなに愛しあったのに」。2006年、ニューヨーク日本誌において「世界が認めた日本女性100人」の一人に選ばれ、表紙を飾った。

ゲスト

安藤仁美 あんどうひとみ

1988年長野県生まれ。早稲田大学中途退学。2013年練馬区江古田に「ガラクタやネバーランド」をオープン。国籍・年代は完全無視、店内には独断と偏見により選ばれた中古雑貨たちが並ぶ。2014年より江古田の街を舞台にした小説「ためきたん^音」を執筆、無料配布している。生活を営むことが好き。その傍ら、生活にこれといった必要のないもの売り続ける。

小山田徹 こやまだとおる

1961年に鹿児島に生まれる。京都市立芸術大学日本画科卒業。美術家。1998年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。並行して「風景収集狂舎」の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行い現在に至る。2009年より、京都市立芸術大学で彫刻の教員を務め、現在、同大学美術学部教授。大震災以降の女川での活動を元に出来た「対話工房」のメンバーでもある。



羊屋…「東京スूपとブランケット紀行」は、三年目。最初の頃の記憶がちょっとあやふやになってきているので、振り返りながら、思い出して、始まりの頃から話します。2012年5月17日、個人的なことなんですが、22年間一緒にいた猫が大往生しました。立ち上がれなくなった最期の5日間に、友達がいっぱい駆けつけてくれました。彼らは、わたしの友達であり、猫の友達でもありました。看病といいながら、ただ会いに来る。わたしは医者さんから勧められた自宅で出来る点滴という延命装置を断ったので、数日後に、その猫は確実に死ぬ。それを待つしかない間、自分たちが、どういう風に弔われたのかという話を自然にしてみました。火葬はやだとか、土葬がいいとか、樹の下に埋めてとか、海に流してとか、そういう普段話さないようなことを、あの猫が死に近づいてるっていう状態の時に、猫を囲みながら友達たちとそういう話をしたことがあり、わたしは人生のクライシスを迎えたというか、未亡人になったなあと。

クライシスは続きまして、舞台作品もなにも作れなくなって、日がな一日ぼーっとしてたんですけど、アーツカウンシル東京の森司さんから、何かやるかね？ってお話があり、ただ演劇じゃなくってねって言われたので、そんなこと出来るかなって思いつつも、ちょっとほっとしたりしてました。いま起きていることから作品を、プロジェクトを考えるしかないなと思ったので、その猫の死から、さまざまな喪失、あの街が無くなるとか、この世界が無くなるとか、頭の中で展開してゆきました。

あの日、猫がたおれたあの日に、猫を看病するわたしのために、もしれない中、170人くらいの人たちが住んでいます。東京の南の端っこの方にある島です。

2年目は、西の端っこに行きました。奥多摩湖。ここは人工の湖です。この東京の西の果てにあった村は、今は、奥多摩湖に沈んでいます。昭和4年くらいに東京がどんどん大きくなり、水が足りなくなりダムを作らなきゃいけないということで、小河内村という村が選ばれて、この村をダムにするから、村の人は追い出されてしまった。これは「日陰の村」という小説にもなっています。ダムを見下ろすと、水が全く動いてなくて、ちょっと気持ち悪い気持ちになっって帰ってきました。村が無くなるということを改めて考えた、東京の西の端へ行く旅でした。

端っこというか、エッジというか、境目ばかりに出かけているのですが、わたしの住まいは、江古田といえます。この街も日々歩いています。2014年に、戦後の闇市の頃から始まった江古田市場、江古田の台所と呼ばれていたところが部分的に閉場しまして、大晦日でした。その辺りを通いながら、お話を聞いたりしておりました。今、跡地は普通にアパートになっちゃうみたいで、そうかそういうものかと、ちょっとつまらない気持ちになっています。

今まで、友達同士で、人が死んでいくとか、ものを失うとか、喪失の記憶の話をし合っていました。外側の方にも話してもらったこととはできないかなと思って、「とむらい」というテーマで、インタビューをはじめました。食事をしながら話を聞こう、その食べ物を載せるランチョンマットをお供にインタビューをしよう。そして、そのランチョンマットを作成してくれた方は、美術家の狩野哲郎さ

スूपを作って鍋に入れて、その鍋を自転車の前のカゴに入れて持ってきた友達がいました。そう。スूपが届いたわけです。やがて、猫の体温が低くなっていったので、温めたり、布団をかけたなり、でも、猫もどんどん痩せてゆきますから、重いブランケットは良くないから、ペットボトルにお湯をいれた湯たんぽを、横たわる猫のまわりに置きました。

何度でも言うのですが、あの日、猫がたおれたあの日に、スूपが届き、猫を毛布で温め、なきがらをその毛布で包み、猫の散歩道だった桜の樹の下に、埋めました。「スूपとブランケット」という言葉はそれが由来です。それから、「東京」を頭に付け。「紀行」は、東京のいろんな所に行つて、いろんな人に会って、この街の何かが終わってること、喪失の記憶、東京の今までとこれから、そういう話をしてくんどうなと思って、付けました。今までの5回の対談紀行でも、最初にこんな話をしてます。そのうち、この話をしなくなるかなと思ったけど、これが出だしなんで、今回もこの話をしました。

1年目は、東京都の一番人口が少ない村、青ヶ島という島に行きました。その旅の報告会では、青ヶ島から東京に来て、青ヶ島料理屋さんをやっている方も呼びびし、青ヶ島滞在レポートから始まり、ひろい見解で、東京の街についてのシンポジウムをしました。

この青ヶ島の方とは交流が続いていて、引き続き対話しています。青ヶ島は、火山でできている島で、1785年くらいに爆発しました。島の人たちは隣の八丈島に逃げました。そして、50年かけてまた青ヶ島に戻った歴史があります。それを「還住」と呼びます。柳田国男さんが付けた言葉です。青ヶ島は活火山なので地面は暖かい。そしてまた爆発するかん、漫画家で小説家の小林エリカさん、画家の高橋つばきさん、で、わたしもつくってみました。インタビューフィルム「とむらい」も完成しましたけど、本当にプライベートなことなんで、どこに気を遣うべきかとか、フラジャイルなことばかりなのです。

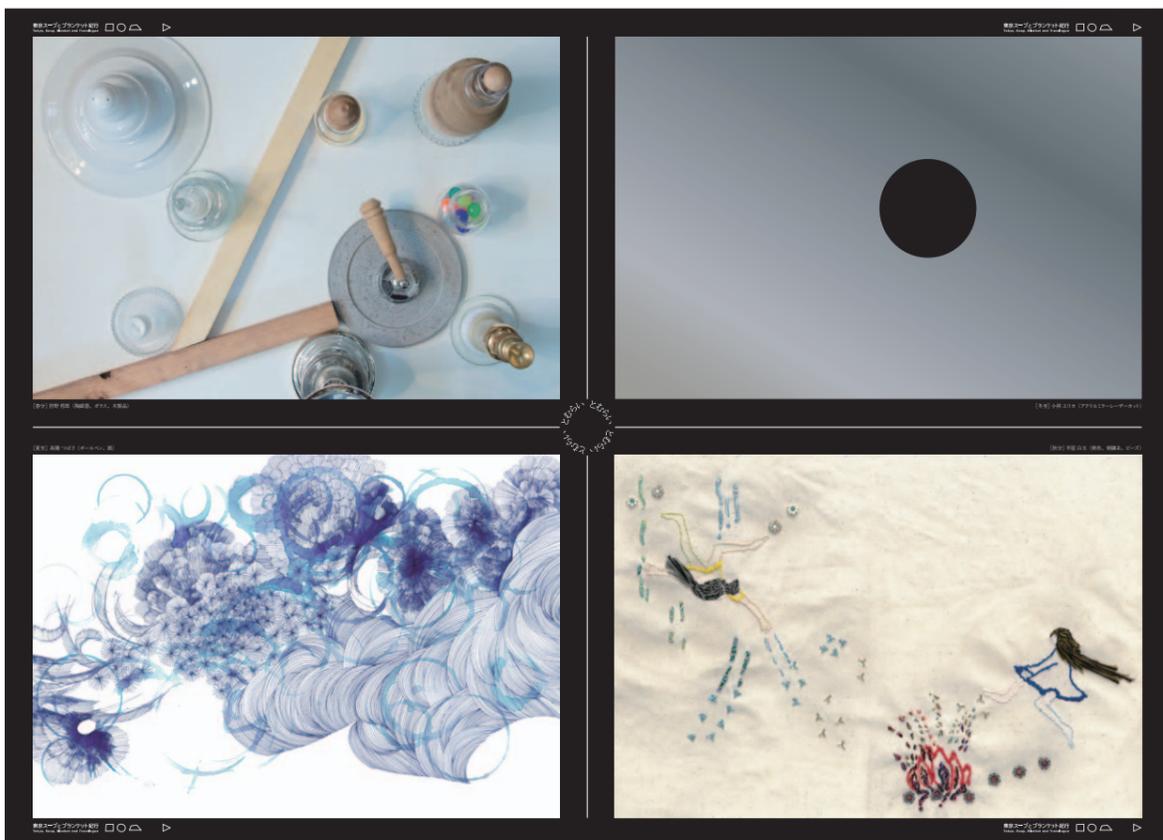
フィルムは二本あります。一本目は東京スूपとブランケット紀行のメンバー、草柳亮のお宅で。そしてもう一本は、取手アートプロジェクトで知り合った、小林えつさんのお宅でお話を伺った映像です。

二本続けて見ていただけたらと思います。

「とむらい」とは

東京スーブとブランケット紀行が提案する「失った人や時間などについて食事をしながら語り合う場に置かれるもの」として作られた作品。これに賛同する四人の作家（狩野哲郎、小林エリカ、高橋つばさ、羊屋白玉）により制作された。作品にはそれぞれ「春分」「夏至」「秋分」「冬至」という名前がつけられている。

ここでは、作品を食卓に置き、なくなった物事について語る「とむらい」を行なった実際の様子を、映画監督の杉田協士が撮影し映像化したものを上映した。



2015年9月30日
東京都・文京区 草椰家にて
「友達のお父さんの死」について
語り手 草椰亮・佐智子
聞き手 羊屋白玉
約12分



2016年3月4日
茨城県・取手市 小林家にて
「娘さんの死」について
語り手 小林えつ
聞き手 羊屋白玉
約20分





羊屋白玉と安藤仁美さん

安藤仁美×羊屋白玉

江古田のガラクタやネーランド店主、安藤さん

羊屋：紹介します。安藤仁美さん。江古田を代表する、ガラクタやネーランドという、ええと、何ですか古道具屋さんって言って良いんですか？

安藤：あのー、本当にガラクタやです。

羊屋：ガラクタやさんね。店主さんですね。自分で買い付けに行き。

安藤：そうですね。全部一人でやってます。

羊屋：ガラクタやってどういうお仕事？どういう風にものを調達したりだとか…？

安藤：基本的にはリサイクルショップと同じような感じなんですけど、買取の基準は、わたし基準なの。例えば、ブランド物だったら高く買い取りますよ、ではなく、わたしが「あ、良い！」と思ったら、いくらでも出しちゃうような感じですよ。それが幼稚園の工作かもしれないけど、何でもです。物という形があれば、取引ができる、それこそ闇市みたいなものをイメージしてやってます。

羊屋：ふらっと立ち寄りなくなる場所ですよ。買わないで帰ることも何度もあるんですけど、前にお店に行った時に、結構人が多くって、ここは今江古田で一番人口密度が高いんじゃない？ってお客さんが言ってたときがありましたね。それと、もうひとつ安藤さんに関して紹介したいことがあるんですけど、もう一つの顔というか、江古田の街を歩いて、お店とかに入るとよく置いてある月間小説「たぬきたん」。これを作ってらっしゃる。

もうひとつの顔、小説家

羊屋：月刊誌で、連載物の小説なんですけど、これを書いてらっしゃるといふ側面もあります。江古田に来てくれれば見つけられます。あと、ウェブ？

安藤：そう、ウェブで見れるようになってるの。「えこだじま」っていう街の情報サイトがあるんですね。街のイベントやお店を統括して紹介してくれてるサイトがありまして、そちらで連載させていただいてます。

羊屋：バックナンバーも読めますね。そして、この「たぬきたん」っていうタイトルなんですけども、江古田の北口、音大通りに浅間湯という銭湯があつて、そのの、マスコットというにはふてぶてしいタヌキの置物があつて、等身大？これにちなんでますか？

安藤：等身大んですよ。

羊屋：このタヌキに導かれるように翻弄されていく男の人の話だと、わたしは「たぬきたん」を、そう解釈して読んでますが。

安藤：はい。お話っていう意味の奇譚をかけて、発音の響きも、なんか「たぬきたん」っていう間が抜けた感じを。

羊屋：そうですね。実際の江古田の喫茶店の方とか、実名も入ってる時がある？

安藤：ほぼぜんぶ実名で、出てくるキャラクター以外はぜんぶ実名で。許可も後から、ちよつと書きちゃいました、みたいな。です。

羊屋：江古田を丸ごと紹介しているなと思いました。わたし、「たぬきたん」を手にとって、誰だろう、書いてるの？って、思っていました。その後、ガラクタやさんを知るんですが、まさかこれとこれが結びつくとは。実際にお会いできたんです。

安藤：はい。



「たぬきたん(奇譚)」バックナンバー

羊屋..お店で取り扱っている物というのは、一回誰かの手を離れて、安藤さんのもとにやって来ている。それは、古着屋さんなんかもそうですが。とにかく、ちよつと話してみたいって思っただけです。

誰かのものが、次の誰かに渡ってゆく場所

羊屋..安藤さんが引き取った物たちは、もう一度値段をつけられて売られるっていうか、世の中に出てゆくでしょ。一度手を離れた物を自分のところに持ってきて、他の人の手に渡る場所をこしらえる。そういう仕事を選んだ。そのきっかけを教えてくださいませんか？

安藤..まず古いものが好きになったきっかけは、わたしが巡っていた古道具屋さんですね。古道具屋さんっていつても、骨董のような良い物を置いているお店ではなくて。ちよつと怪しげな、柄シャツ着て、外でタバコ吸ってるおじちゃんややってる、なんだかよくわからないお店に通うことになったのがきっかけかな。

羊屋..それは江古田？

安藤..石神井のほうのお店です。そのわたしの師匠にあたるおじちゃんが最近行方不明になってしまつて(笑)

羊屋..えーっ？(笑)

安藤..ちよつとガラが悪い人だったので心配で。まあそういう、ちよつと社会からあぶれたような、つて言ったら失礼かもしれないですけど、周りと馴染めないような人がやってる道具屋さんがきっかけですね。それで興味を持ち始めて。で、値段のつけかたも、例えば、三千元でも安い気がするけど、違う人が見たら三百円でも高い気がする、とか。価値つてもあるのかわからないのか、とか。そういう不思議な世界に惹きこまれていきました。アジアの市場では、買い手と売り

手とで一致したら、交渉成立。そんな世界に憧れて始めたんです。

ガラタヤネバーランドの様子

羊屋..看板が…

安藤..看板がない。

羊屋..以前、整体屋さんだったんですか？

安藤..体質整体院のお店の跡地ですね。

羊屋..看板変えてないんですね。

安藤..閉まると何の店かわからないですね。金銭的な理由で変えなかったっていうだけなんですけど。最近、物を引き取ってもらえませんか？つて方が、ちよこちよこいらしてくれていますね。

羊屋..お店の中、あじがありますね。カオスというか。

安藤..はい。リサイクルショップみたいに整然としてなくて、雑多という感じ。わたしの師匠がやっていたゴチャゴチャした感じも残しつつ、わりと商品にスポットを当ててあげたかったので、この子はこの場所じゃないと！つて。なのでわたしには、その子たちがそこにいる理由が、はっきりしてます。だから動かさないとねつて。

羊屋..ガラタヤさんにゆくと、そこに戻してね、つて、言われてる感じがする時がありますね。

安藤..そうですね。個性のあるおもしろいものばかりですが、みんな揃うとまとまりがあるように並べてあげたいなって、思っています。学校の先生になったような気分というか。

羊屋..朝来たときに、居場所が変わつてたりとかは？

安藤..夜、お店で動き回つても、朝にはちゃんと戻つて。

羊屋..しつが、ゆきとどいてる。



ガラタヤネバーランドの店先



新入荷のパフレットを物色する羊屋白玉

医療関係の学校を経て、古物の業界へ

羊屋…みなさん、この店ほんとうに江古田にあるので、一度行っていただきたいんですよ。そうだとだけしか聞いてないですけど、医療関係の学校にいた？

安藤…人間科学部の健康福祉学科っていうところですよ。そこで、植物状態の方の命をどう考えるかについての、小さなゼミには入っていません。でもあんまり学校に行ってなかったのが大したことはいらないんですけど、ホスピスにちよつと行ったりですとか。確かに、このお店を始めるのも、わたしの祖母が亡くなったのがきっかけではあったので。

羊屋…はい。

安藤…やっぱ古いものに興味があつて、その価値をちよつと勉強して途中で祖母が亡くなって、その遺品をどうするかっていう話になったときに、「じゃあわたしがぜんぶ引取って売ります。」って、全部背負って始めた、っていうのが直接的なきっかけでした。

羊屋…うんうん。その植物状態、たとえば、ホスピスの臨床とかしたんですか？

安藤…またそれは理系の分野ですね。わたしは文系の見解から見てゆく立場でしたけど。結局、どれだけみんな話合っても答えが出ない話題でしたから、もう堂々巡りというか。だから、わたしとしては、着地点が見られなかったのは残念ではあるんですけどね。

羊屋…はい。でもなんかその堂々巡り、なんとなくわかるんですけど、それはこの場所に来て、なんかまだあるような気が…

安藤…そうですね。実際に古物の業界では、物がどこから来たって情報は、買いに来たお客さんに言わないんですよ。亡くなった方が持ってたっていうのが嫌な方もいらつしやいますし。だから、これ、どこから

江古田で商いを始めて3年目

羊屋…で、どうして江古田で？

安藤…商売だから人が多いところがよいと思うんですけど、わたしあんまり人が好きじゃない…

羊屋…ああ、うんうん。

安藤…人混みに入れないタイプというか、その点、江古田はあんまり人がいないですよ。商売が成り立たなくても、ま、それは覚悟のうえで、あんまりゴチャゴチャしてない街の、商店街のはずれ、ここはほんとにドン詰まりでしょ。ちよつといいなあ、と。

羊屋…まさにそうですね。小さいお店が集まっている通りのはじっこにお店を構えて、どんな感じですか？なにか関係作りとかしていますか？

安藤…挨拶だけしようと思つてましたけど。みなさんからも、行きかう時に声を掛けてくれたりだとか。なんかひとりでおねえちゃんがお店を始めたつてことで心配して見に来てくれたり。お昼過ぎになるとカップラーメンにお湯を張つて毎日持つてきてくれたり。「お魚焼けたよ。」とか。煮物がタッパーに入つて開店前のシャッターの前に置いてあつたりとか。どなたか分からない時もあるけど、そういうご好意が。

羊屋…「これ売りものはどう？」っていう意味じゃないんですよ？

安藤…食べ物、差し入れだと思つてですけど。でも、売ってほしいって、すごい古いパチンコ台が置いてあつたりとか。

羊屋…あ、なるほど、ただ置いてある。

安藤…ただ置いてある。まるでマンガのような世界なんですけど。

羊屋…「たぬぎたん」の世界に影響しているかもですね。

安藤…そうですね。あと、江古田つて、芸術系の大学がふたつもあるし。

羊屋…「たぬぎたん」の主役の人、大学生の設定ですよ。大学8年生？

買ったの？つて、聞かれた時に気軽に言わないんです。こんな依頼がありました。おばあちゃんが亡くなって、たくさん物があるので見に来てもらえませんか？つて。で、ひとりで行きました。ただ、そういう方たちに聞くと、業者に頼むと何十万かお支払いをして、大きいトラックが家の前に停まつて、作業員が2、3人来て、時間短縮のために二階から物をバンバン威勢良く運ぶ。細かいものから大きいものまで、すべて業務として持つて行かれちゃつて、なんか寂しい気がしてたのよね、つて、みんなおっしゃるんですよ。

羊屋…そうなんですね。

安藤…わたしもこの仕事を始めたばかりで時間もたくさんあつたし、おばあちゃんの使つた物のエピソードを聞いたんですよ。山登りが好きだったから山登り道具とか、旅行に行つた時に買ったものとか聞いてると、そのうちお茶とか出してきて、たまには夕飯もご馳走になったりもするんですよ。わたしは軽自動車一台で行くんですけど、積めるだけ積みます。で、「こんなのダメよね？」つて言われても、わたしがいいかな、と思つたら積み込んじゃうので、「じゃあ売れたら連絡しますね。」みたいな感じですよ。他の買取の話だと、近所のおばあちゃんが大事にしてたりユックが売れた日があつて、その日にはなんか嬉しかったので電話をして、「あれ、売れましたよ。」つて、「学生さんだったけど。」つて。そういうエピソードを共有することすごく喜んでくださる。あなたに頼んだほうが、気持ち的に落ち着いたわ、最後にお線香も上げてもらえて、なんかすごくスッキリしましたよ。つておっしゃつてくれて。もしかしたらこのわたしがやつてることつていうのを、求めている人がいるのかも知れないな、つていうふうなときにちよつと思つたかもしれないです。

羊屋…わたしも求めている人のひとりですよ。

友達に日芸の学生さんがいたり。

安藤…ふふ。芝居小屋とかもたくさんあるし。アートの関心がある人が多いな、つていうイメージがまずあつて。そういうところなら、馴染めるかなみたいなね。わたしたちに時間を守れなかったりとか、お金もちよつと緩いし、お店にレジがないし、勝手におまけしちゃうしで、そんな営業の仕方ではイジメられないようなところ、江古田かな、と。一般的には、外から入つてくる人に厳しいつて話をどこでも聞くので、それが怖くつてね。で、ここに来てみたら、「今日寝坊したんですよ。」とか声かけてくれたり。だから、こんなわたしでもなんとかやつていけるように、そんな方たちが、たまたまそばにいて、それで長居できた。まだやつと三年なんですけど。



夕暮れの江古田市場通り

市場が暮を閉じて

羊屋.. 三年経ったんですね。じゃあ、江古田市場が閉場する前後を、そばで見てるんですね。いま江古田市場跡地は更地だけど、土台の工事が始まって、アパートになるとか？そういう街の話題と違って、ガラクタやさんに来た人たちと話したりしますか？

安藤.. ウチに来るお客さんもそうだし、まわりのお店の人も、そういう話をすることが多いです。市場跡地がどうなるかって、いろんな説を唱える方々もいて。

羊屋.. 世代世代で感じ方は違うでしょうね。商店街の集まりで、若い世代の人たちをなんて言ってたっけ？ええと..

安藤.. 「フレッシュ」ですね。年配の商店街の役員の方たちが、わたしたちの意見を聞こうとして会を開いてくれたんですね。フレッシュ会って書いてあって、あれは笑っちゃいました。

羊屋.. フレッシュ世代の話、聞いてくれました？

安藤.. ええと。結局、こういうふうに決まっているってことを教えていただきました。そこからは、あまり、外れられないっていうこととかを、教えていただきましたって感じですよ。

羊屋.. 大変そうですね。

安藤.. 80代90代の方もお元気で、50、60代でも若手って言われてるんですよ。だから、フレッシュ世代は、芽が出たぐらいですよ。そんなひよっこが、街をどうしてゆくかって議題に意見を通すなんて、あの市場の跡についてもそうですけど、滅相もないというか。

羊屋.. うんうん。江古田を歩くたびに、変わってゆくなど。変わっていいんですが、変わるスピードが早過ぎて、自分の中で收拾がつかなくなるし。ちょっとわかりかけたかと思ったら、また違うことが起きているし。ずっと街を俯瞰してる、神様みたいな大きな鳥とか、遠

近商用で見つめながら、何かを考えてる人がいたら、ぜひご意見を聞きたいと思うことがあります。

安藤.. 商店街に入ってから、若い人たちのいろんな活動や小さな流れがいくつもあるのは知ってますし、わたしもそうですが、大きな流れや歴史を前にすると、ちょっと無力感も半分ぐらいありますよ、ほんとは。

羊屋.. クジラに小魚が飲み込まれる映像を想像しました..。ええと、茨城県の手取市のはなしをします。

安藤.. はい。

羊屋.. ええと、昨日、取手という街に行きまして。東京藝術大学の校舎がある街で、大学をでて、そのまま取手に住み続けながら、美術の活動をしているアーティスト達がけっこういるのね。彼らから話を聞くと、家賃とか何も払えないけど、そのかわり無償でポスター描きます、看板描きますって方法で、住み始めてる方たちがいる。でも、いまやっと仕事になってきて、発注を受けるようになってきて、絵画教室もあるスペース兼アトリエも持っている。その街の中で生活をしていくっていうことが安定していくと、もつと広いことを考えてゆく方向が見えてくる。「まだどうしたらよいかわからないけど」って。取手の街で、わたしと同じようなことを考えている人はいるな。と、思っていたところです。

動き出したガラクタやネバーランド

安藤.. お店をやる前には考えなかったようなことを、今は考えるようになってます。お金の回り方とかも感覚が違って。そう、近所の八百屋さんでお野菜を買いますよね。

羊屋.. ああ、はい。

安藤.. 八百屋さんにいつもの配達のいつものおじさんが来ていて、八百屋さんと配達屋さんの会話を聞いている自分がいるのね。長いお付き合いのおふたりなんだなということもわかるの。で、ここでお金を払ったときに、この八百屋さんと配達屋さんを通して、信用しているであろう農家の方へもお金が回っていくんだな、って、目に見えてわかってくる。だから、この少ししかないお金をどう使おうかって、ひたすら考えるようにはなりました。あの人が作っているご飯を食べたいなんて、今まで考えたことなかった。お店始めたことから、お金を貯めるのにやりくりして、だから深夜のスーパーで、なんとなく詰め込むように買い物してたんですけど、今は変わりました。

羊屋.. そうか。わかりました。なんか安藤さん、動き始めているな、いいなって思ってたんです。こないだ、「たぬきたん」の朗読会を、江古田のライブハウスでやって、それは安藤さん主催ですよ。

安藤.. そうですね。

羊屋.. うん。で、江古田で活躍している俳優の方たちが「たぬきたん」を朗読してるんですけど、カウンターのなかでも、その朗読と平行して唐揚げを揚げている方がいて、みんなに振る舞われたんですけど。あの方の唐揚げと、「たぬきたん」の朗読はマッチするだろうと思っ

て決めたんですか？

安藤.. そうです。作る人やよく食べる人はやっぱり美味しいものを作るん



浅間湯のためき目

じゃないかなと思って。

羊屋.. すごい美味しい唐揚げでした。

安藤.. 唐揚げアーティストさんなんです。鶏の被り物をいつも被ってらっしゃって、鶏の解体からされるんです。やっぱり街の方と交流するためのイベントだったので、食べ物必須だなと思っていて。

羊屋.. もう食べ物ってズルいですよね、ほんとに。ズルさはわかって使いますけど。そして今はね、わたしたちふたり、江古田でいたいこの時間を過ごしているってのが共通ってことで、話してますけど、他の街にお住まいの方どうですか？生活も仕事もほぼ同じ街でという方は、いらっしゃいますか？（観客へ尋ねました。挙手をされた方がいたので。）あ、どちらからですか？

街を見る

観客.. 恵比寿です。

安藤.. わ。ビビってしまった（笑）

羊屋.. 恵比寿。「え」まで聞いたとき江古田かと思ったけど、恵比寿だった。ええと。どうですか？どのように、えっと、仕事場も生活の場も恵比寿？

観客.. そうです。

羊屋.. どんな？

観客.. でもそんなにオシャレな仕事でもオシャレな住まいでもないんですけど。羊屋.. やっぱり自分の住まいの界限を、パトロールっていうか、歩いて、なにか感情を動かされたことってありますか？なにか変化したりとかっていう。

観客.. まだ住み始めて3年ぐらいですし、場所に対する愛着みたいなものとかには、まだ辿り着かなくて。たまたまここに住んでいて、たまたまここで仕事をしている、ぐらいのことしか、わたしは…

羊屋.. そうなんです。3年なんです。わたしはどうだったのかな。ありがとうございます。

安藤.. わたし、普通に、OLしてた時もあった、そうするとやっぱり、街を見るまでの余裕がなかった。一日をなんとか過ごすだけで、一杯だった。自分の経験を踏まえてですけど、なにか個人店に愛着を持つとかってというのは、余裕のある人じゃないとできないと思います。心の余裕と、あと金銭的にもそうです。だから、必死で子育てして、働いてるお母さんたちに、スーパーで買うよりは個人店で…って、言うのは、ちよつと失礼なのかなとも思いますね。



羊屋白玉と安藤仁美さん

羊屋..そうですね。じゃあ、そのお母さんたちができないそこらへんのところは、わたしが請け負おうと思ったりもするんだけど、それで良いわけがなくて、自分の住む街や、暮しのことも考えられないような働き方の環境改善について、政治家も取り組んでいる人たちがいますね。両方から、支えてゆけると良いけど。でも社会がハッピーだったとしたら、安藤さんは今の稼業へ辿り着いたんだろうか。わたしはどうだろうか。不安な世の中って、アーティストへの餌なのかもしれないぞ。食べてよいんだらうかって迷う。それから、この対談紀行は、この場所で5回やってきたんですけれど、次の対談は、江古田でやろうと、そして、ほぼ決まったんですよ。いよいよってかんで、嬉しいんですけど、怖いんですよ。自分の住んでいる場所で行うアートプロジェクトの怖さなのかな。ずっと恐怖なんですよ。これもまた、なぜだかちよつと言葉にならないんですよ。

安藤..あ、でも、わかります。芸術関係に携わっている人たちは、わりと共感できることっていろいろはたくさんあるな、と思ってる。街のことを話しても、どういうお店を使うとか、生き方のひとつであって、どういう生き方をしたいとかこれが食べたかって、そういう生活の細かいところが心の中で決まってる人が多い。それとは別の、必死に生活している人たちとお話するときに、ちよつと噛み合わないといいますが、暮らしを選択するというところに、余裕がまったくなくなって普通に生活している人って、たくさんいて、むしろそっちの人たちのほうが多いんだと思う。今まで市場に来てた人たちも、なんとなく生活の一部として市場を使っていたんだけど、今は信念というか、自分がどうやって生活していきたいかっていうのをわかっている人ではないと、街になかなか踏み込んでいけないのではないかな。みんながゆつくりと生活できるようになるには、とか、

小山田徹×羊屋白玉

デンマークの古着屋さんのズボン

羊屋..はい。小山田徹さんです。京都からいらっしやいました。よろしくお願ひします。

小山田..あ、はい。こんにちは。どうしよう。もつとモヤつとなったらどうしよう。

羊屋..どうしましょうか。うん。それではですね。先ほど見ていただいた二つ目の「とむらい」映像に出演してくれた、取手の小林えつさん。小山田さんのご存知なんですよ？

小山田..そうですね。あの、小林さんとは長い付き合いで、取手でプロジェクトやるたんびに泊めていただいて。そして、ああいう方の存在っていうのが、様々なプロジェクトを支えてるな、っていうのが正直なところですよ。アートは弱いよね。アートの世の中が変わるんじゃないかって、ああいう方々がアートを変えてるんだなって、強く感じる方のひとりです。うん。

羊屋..はい。安藤さんに対してわたし、そういうことを感じるんです。小山田..そう。安藤さんの話聞いてて、思い出したことがあってね。ええと、僕はダムタイプっていうパフォーマンズグループをやっていたんですが、初期のころに、よくデンマークでプロジェクトして、デンマークのコペンハーゲンに住んでる時、フラツと古着屋さんに入ったことがあるんですよ。しみじみとした、ぜんぜん派手さのない古着屋さん。そこに入ってみると、衣料が吊ってあるんだけど、奥に大きなテーブルがあって、そこになぜかおじいさんとおばあさんが、8人くらい座ってるのよ。

羊屋..不思議なお店ですね。

働き方とは、とか、そういうところも関係している話題な気がして、街づくりの根本っていうのかな。それはほんとに深く、難しすぎる。羊屋..切なくなってきました。ええと、みなさん、こういう話、いましてますけど、こういう切ない話を聞きにきました？

観客(笑)

羊屋..笑ってる。いいってこと？

安藤..なんでしたっけ？

羊屋..えつとね、次、休憩せずに小山田さんと話んですけど、安藤さん、

いい感じのところに、また戻ってきてもらっていいですか？

安藤..あ、わかりました。

羊屋..モヤモヤ。

安藤..モヤつとしたままですよ。

羊屋..小山田さんにすべてを賭けようと思ってる。

安藤..お願ひします。

羊屋..ほんとに耐久レースみたいではありません。

安藤..ありがとうございます。

羊屋..いったん。



小山田徹さん



小山田さんがコペンハーゲン出会ったズボン (写真：小山田徹)

小山田…そうそう。で、入ったら、その方々がワラワラーって出てきて、

あなたにはこの洋服が似合うわ、とか、このズボン、ピッタリよね、とか、すすめてくるんですよ。僕は、えーっ？これ、なんの店なんやろう？と思ってしばらく話したら、じつは娘さん息子さんを先に亡くした方で、そこに吊ってある洋服群は遺品なんですよ。デジマークっていろんな活動の実験をしているところなんですけど、このお店はそういう方々のための社会復帰や精神的な立ち直りをするための試みのひとつとして、遺品の整理を、なんかポジティブなかたちでスタートした。だからプロジェクトっていうよりは、もう自主的に始まった取り組みだね。家に娘さん息子さんのクローゼットが置かれているまま、哀しんでいるだけではなくて、流通っていうかたちの中に出すことになって、なにか変えていけないかなっていうことだと思っんですよ。

羊屋…それ、おじいちゃんおばあちゃんたちがみずからってことですか？

小山田…そうね。行ったらもうたまらないんですよ。この服ピッタリだ、って言われて、確かにピッタリなんです。生きてたらあなたと同じぐらいの歳なんだから。で、それでコーディネートされたら、もう買わないわけにはいかないんですよ。そんなメモリーが付いたかたちで洋服とか物品を手にするっていうのが、大事なかなというのを気づかされたショッピングでした。だからもう、捨てられないんですよ。お店から帰るとき、もし使わなくなったら、また持つて帰ってきてね、って言われるんですよ。でもまあ、デジマークですからね、もう返せないんですけど。あの服は、今は破れたりポロポロになってるんですけど、捨てられないの。なので、最近はそのような一回パターンにして、ウチの奥さん洋服やってるから、ちょっと作ってもらって、かたちを変えて着たりはしてるんですけど。

羊屋…ズボンと？

小山田…ええと、シャツとズボン。で、ズボンがもうすごいフィットするズボンで、ここにポケットの付いてる、いい、使いやすいズボンをいただいで、それは青年だった頃に亡くなった方の遺品らしいんですよ。

羊屋…いまそのままはけてるんですか？

小山田…はきすぎて、わたしともいろいろな旅をしてポロポロになったんですけど、いまそれを型取りしてるとこかな。

羊屋…ああ。

小山田…いいもんですよ。ある種の想いが乗ったものって、普通は重い状態になるけど、一方では、その重さがない社会の消費の仕方っていうのが、今の現状を作ってるのは確かにある。もしかしたら、その方々が着てた服も、バーゲンとかで買ったものなのかもしれないけど、遺品っていうかたちになって、流通の根幹にもう一度きたりすると、いいなあと思う。その古道具とかも、ある種の価値観でビックアップされて、さらにそれをいいと思う方が手にしてゆくなっていうかたちや、遺品であったものが、道具としてもう一度再生してくとか、すごい興味深い感じがしたな。

「繕う」

羊屋…わたし、3日前に、白っぽいズック靴、汚れてきたから洗おうと思ったんです。子供の頃、わたし北海道生まれなので夏の靴と冬の靴はぜんぜん違うから、夏が終わったら、洗つときなさいよ、次の夏が来るまでに、って、お母さんに言われていて。当時、靴を洗う用の洗剤というのがあって、柄のついたたわしで夏靴を自分で洗ってたの。3日前、買いにいったらなくて、もう売ってないんだな、



江古田の古書店

と違って。でも、どんな洗剤でもいいわけだから、衣料用の洗剤で洗ったんですけど。なんていうのかな、汚れたら捨てちゃうって今って頻度高い。でもなるべく洗いたい。洗ってまた使いたい。壊れたら直したい。修理をするっていう仕事、昔はもつと多かったですよ。昔の人は、そんなに深くなくても多様な技術をたくさん持ってたはずなんです。

小山田…「繕う」っていう言葉が、日常の労働のひとつとして存在してたね。今、僕らのまわりの日常に「繕い」っていうものはあんまり存在してないかな。

羊屋…「繕う」が美徳じゃなくなった風潮があったような気がする。

小山田…面倒臭くなったのかなあ。だから僕たちは、潰しがきかないんですよ。昔の人は、そんなに深くなくても多様な技術をたくさん持ってたはずなんですけど、潰しがきかないよね。

羊屋…おばあちゃんは、和裁してて、着物を着てました。傷んできたら、もう一回仕立て直して、それでもボロボロになったら、手ぬぐいにして、雑巾にして、オシメにしたりとかって、もう繊維がボロボロになるまで。

小山田…こなれてきた繊維はそれなりの役割があつて。

羊屋…うん、赤ちゃんに優しい。

小山田…ウチは、奥さん洋裁やつてるので、そのへんの技術はあるので。物の姿を変えながらずっと使い続けてゆける。子供の夏用のズボンとかは、浴衣地が、いまやったらなんていうんかな？サルエルパンツになつたりして。

羊屋…サルエルパンツ！そんな言葉、知ってるのね。小山田さん。

ニューヨークの本屋さんの書棚

小山田…知ってるよ。あとね。洋服じゃなくて、今度は本なんですけど、ダ

ムタイプでエイズの様々な活動をした時、ニューヨークでゲイの方々の遺産管理について調べることになったの。その当時、まあ亡くなられると、パートナーは遺産管理に参加できなかったんですよ。必ず家族の方に権利がいつちゃうと。でも、ゲイで、アクティビストで、だったりすると、大概、家族と仲が悪いんですよ。だから、家族に遺品がいつても、ただのゴミなの。

羊屋…ごみ。

小山田…そう。でも社会的な活動をしている方々が、少なくとも、エイズで死んだゲイの方の蔵書と呼ばれる本の一群を、その方の遺族にゴミにしないでくれ。と、掛け合つたの。その方は、古本屋さんで、それぞれの棚が故人の名前の付いた棚なんです。本の裏のほうに、メモリーがちゃんと書いてある。誰が持ってた本である。この本屋の存在を見て、凄いなと思いました。本は、もともと貴重なもので、前の持ち主から譲り受けたり買ったりする文化もあつたし、あと経済的にも古本屋を活用する時代も長かつたけど、いまはインターネットでポチッと次々に届く時代で、物の在り方が違う。でもその古本屋に行くと、すごくいい空気が流れてるんですよ。で、こう真ん中にテーブルがあつてコーヒーが飲める喫茶店でもあるんですよ。

羊屋…どこらへんの街ですか、ニューヨークの？

小山田…ニューヨークのね、14丁目あたりにあつたんやけど、それも、でも20年以上前、80年代後半の話なので、いまあるかどうかはわからない。エイズにまつわる様々な活動の中、本の在り方について提言しつつも、まあ素直に素敵なんですよ。いい空気が物と一緒に流れてくる。それを発明できる人々って偉いなと思って、参考にしたい覚えがあります。ね。大事にするよね。

焚き火の魅力をロジカルに語ってください

羊屋…さつき、ちょこつと話していたら、小山田さんが、火を囲むと大概のことは解決できるのかもしれないなって、おっしゃってた。というわけで、だから今日ここで話します。対談紀行でも、みんな火を囲んでいるイメージを想像しながら、話したいなとはずっと思つてたし、それくらい素敵なことだつて、わたしだけでは多くの人には、思っていると思うんだけど、それをロジカルに、どうして焚き火なのか。つて説明つて、したりするんですか？

小山田…あの、時と場合によるかな。いくら言葉を尽くしても、焚き火の魅力っていうのは、多分もうみなさんのほうがわかってるんだよね。やってみると、わっ！となる。特にね、経験のある方、もしくは年配の方々っていうのは、焚き火がいかに楽しいかっていうのは、もう知っておられるので、細々とやることはないねんけど、行政にその企画を通したりする時は、それなりにロジカルに説明したりします。(笑)単純に焚き火したいっていつて消防署に届けて、まあ届けは受理されるんだけど、問題は近隣関係なんです。あの、焚き火をすることは許されず、法律的に。でもご近所が許さないんですよ。で、大概通報がいくと消防署は動かざるをえないので、一回声掛けに来たりとか。あとまあ、最近では直接言わない世の中なので、ご近所の方がちゃんと文句を言いに来るといったことはないんですよ。窓の向こう側で電話をしちゃう。

羊屋…なるほど。

小山田…僕は、共有空間を様々なかたちでつくりたいとして、カフェを使ったりとか、いろんなことをやってみただけで、いちばんラクなのは焚き火ができたときでした。焚き火さえあれば、何の企画もいらぬ。「始めます！」という言葉すらいらぬ。準備段階からみんな

な動いてるからなんです。やることわかってるもんね。火を熾すっていうことだけでも。

羊屋…その火を熾すっていうことが、なんか人類の尊厳というか、なんか…

小山田…ねえ、百万年以上の付き合いをしてきてる。

羊屋…付き合い(笑)

小山田…原生人類は十万年ぐらいだとは思いますが、ぼくらの先輩の人類たちはもつと前から使ってたと思うし、毎晩、火のなかった時なんてないんじゃないかと思うぐらい。それが、つい4、50年前から、今まで綿々と毎晩付き合ってきたはずなのに、パタッとできなくなってるんですよ。で、家から直火も少なくなってきた。

羊屋…ああ、電気コンロだ。

小山田…うん。子供たちも、焚き火はする機会もあるかもしれないけど、管理された焚き火ですよ。キャンプファイヤーにしても大人が管理していて、そんなに自由ができない。で、ケガしたら大変なことになると。なので、40年ぐらい前に途切れてるんですよ。人類初めての出来事ですよ。

焚き火を囲むと自己紹介などいらない

小山田…もうエラいことが起こるんじゃないかなと思ってるんですよ。辛うじてぼくらの、DNAは、何かを刻み込まれてるはずで、炎を前にした時に、心の中にいろんな動きが起こるんじゃないかなって。で、実際にやってみると、柔らかな対話が自然に派生してて、放っておいても喋ったり、黙ってずっとみんなが炎を見てても大丈夫だし、なんかすごいいい時間の流れがあるし、自己紹介しないままに喋ってるんですよ。そのうち、ものすごい深い話をしてんねんけど、じゃあね、っていった時に、あの人、誰だったっけ？って。

羊屋…ありますね。あのほら、維新派って関西の劇団で、野外で劇場を組んで…

小山田…そう。毎回、終わった後が楽しいんですよ。

羊屋…そう、焚き火たいて。で、そこで知り合って、いろんな出会いが、

あの維新派の焚き火でありました。

小山田…(「維新派」代表の松本) 雄吉さんも、焚き火がしたいのよ…

羊屋…え、演劇じゃなく？(笑)

小山田…演劇もしたいけど、焚き火のない演劇はしたくない。気持ちはよくわかるな、と思って。なにが大事かっていうのが、なんとなくあの方もわかってるのかなと。なんか、そのあとに起こる対話と関係性の作られ方っていうのは、絶大な影響力あるんだろうなと思う。

羊屋…火を見るだけで何杯でも飲めるとか言っていたような。

小山田…劇場のロビーでは、関係性はあんまりできないですよ。

羊屋…そうですね。

小山田…名刺交換で終わってしまう。でも、しかも火があると、食べ物が付いてきます、必ず。

羊屋…そうですね。

小山田…しかも火で調理した食べ物は、必ずシェアされます。ほんとに不思議なぐらいみんな分け合いをするし。同じ状況は東日本大震災とかこないだの熊本とかでも、ああいう緊急災害時になると、自然にそういうことが起こっちゃうんですよ。で、それで生き延びていくし、そこが重要な会議の場所になったりしてるはず。なのに、仮設住宅ができた瞬間に、火気厳禁になるんですよ。で、個別住居が与えられて、みなさんが個別に住むようになると、コミュニケーションが途絶して、いちいち会議を招集しないと、しかも業者が来るっていうかたちで物事の伝達が進んでいなくなるをえないっていう

のが、何かを象徴しているような気はします。街の話し合いは、飲み屋であつたり焚き火場であつたり、いろんなところで行われたはずなのに、会議室で行わなきゃいけない状態になった瞬間に、目詰まりを起こしているような気がします。焚き火場で喋られることは、誰も記録に残しませんから、会議しました、っていう証拠が残らないのは問題なんだけど、だからこそいろんな意見も出るし、自然に決まってくし、そういう共同体が内包できる体力が失われたんだろうなあ。

羊屋…そう。文書には残ってないけど、あのとき約束したぞ、って、強く覚えていたりします。

小山田…心地のよかったときに決めたことって、守るし。つまんなかったら、あんまり心に残ってないのかもしれない。

羊屋…40年前とかっていうと、1976年とか？

小山田…高度成長期の完成期で、ちょうど僕らが大人になりつつあるころには、今の生活形態が完全に出来上がって、それぞれがマイホーム、マイマンション、マイアパートを持つ時代になって、家の中に閉じこもって、家がお城になってきた時代が、日本の高度成長期の、あの姿だと思っただけ。

焚き火を失った今。でも、何を得たんでしょうか

羊屋…焚き火を失って、でも、何を得たんでしょうか。

小山田…焚き火は情報を共有する場でもあつたけど、その代わりに、テレビが登場したんじゃないかな。みんながテレビっていうのを見てた時代なんちゃうかな。そして、個食が始まるよね。家族で食べる時間を持てる家族もいるけど、お父ちゃん忙しい、子供は塾に行き始める。そうなると、個別の時間でご飯を食べるようになるよね。夕



銭湯の煙突



江古田スープの台所

東京スープロとブランケット紀行は、個人の記憶の蓄積がベースにある

小山田…なんかあの、この企画さ、アーツカウンシル東京を通じて、企画の話を見せてもらって、すごい興味を持ったのは、お見送りとかそういう、亡くなった方、もしくは無くなった事々の記憶をどう扱うかっていうのを、プライベートも込みで、ちよつと内包した企画ってというのは、すごい重要やなと思って、オレ自身もやっている活動にもかなり被ることがあって、ずっと注視してたんですよ。

羊屋…ありがとうございます。プライベートのことっていうの、その人中にだけあることなので、わたしは、その人だけにあることから、その人だけじゃないところまで持つて行くべきなのか、それは暴力なのかもしれないと思ったりします。あとやっぱり、アートプロジェクトですから、作品というか、表現かもしれないよね。で、表現の自由ってあるわけなんですけれども、それは相手にとつての幸福追求権っていうのを侵害してるんじゃないかって、表現の自由と幸福追求権って、いつも矛盾を、自分の中で起こします。たとえば先ほど見ていただいた映像なんか、オーラルヒストリーというか、なんかそのまま、一切加工せず見てもいいましたけど。

小山田…いままでも、こういう企画って、べつに世の中の表現のフォーマットを作るためにやってるわけではないので、さんざん悩んでいただいたほうがいいんじゃないかと（笑）

羊屋…はい。

小山田…たぶん個別なんだよね。計算するっていうか関わる側のパーソナリティにもよるし、その思いを持っておられる方にもよるし。

羊屋…はい。大きな文脈にしたくないんです。

小山田…ねえ。だからこういうのは、細かく積み重ねていって、みんながちよつとずつ深いところに時々降りていって、ちよつと考えてみるんだけどね。しか出せないけれど、それに関わられた方々の心の中で蓄積されて、たぶん十年後とか二十年後ぐらいに、別のものに翻訳されて、何かに変わるんだろうなと。だから、たぶんお金を出す側のほうも、早急な数値的結果を求めてるわけではない。って、いうことを願ってるんだけどね。

羊屋…はい。ただまあ、大概にしろ！っていつ言われるかなって。だからといって路線は変更したくないので、心行くまでやろうと思つていきます。それから、フィードバックがもらえるような仕組みだけ作りたいなっていうのは、すごくいつも思ってるんですよ。

小山田…この世の中の、ほとんどの方は、様々なかたちでお見送りであったり弔いであったりとか、喪失感を抱えながら現世を生きているということとせざるを得ない立場にありますよね。それぞれがそれぞれの様々な努力と工夫をしたりしてる。そういうのをちよつとずつ対話っていうかたちで人と交換できたり、そういうのがサラッとできるような、世の中のある手法みたいなものが、そのうち発見していったら、発見もしくは発明できたら、すごく楽しくなるな、って思う。

羊屋…はい。

りとかするのを繰り返していくしかないのかな、と思うな。

羊屋…うん。

小山田…ちよつとたら浄化されますよ、っていうようなものを作りたいわけじゃないなと。

羊屋…違います。根っこから、プライベート発信で始まっているっていうのもあるんですけど、それを東京に無理やり置き換えたときに、わたし知ってる東京、わたしが経験した東京っていうのは、始まりは大学生、当時は近未来都市のよう。海外に行っても、「日本」って響きは知らないけど、「東京」っていう響きは知ってるっていう、「東京」の方が知られていた。でもいまはすごく廃墟というか、遺跡の街に思える。東京は、自分の作品の主な発表の場だったし、お世話になつていっているという気持ちもあるけど、だからこそ、この頃、ほんとうに死にそうになつてるな、って、東京のことを休ませたい。ものすごい擬人化してますけれども。東京に、一度ちいさな死を！って、弔わなければいけないんじゃないか、って考えが進んだの。一回、安らかに眠っていただいて、そのための弔いの何かができたらな、っていうのがやりたいことなんです。全速力で走っているから、失速してみないと次の息が吸えないなって。

小山田…うん。なんかこれって、公的なお金との相性悪そうなんですよ。

これ、言つていいのかどうかかわかんないけどね（笑）

羊屋…ディレクターの森司さんが酔狂な人でね。まあ、怒られたり励まされたりしてますけど（笑）

小山田…個人的体験を蓄積してゆく企画でしょ。もう信頼として投資をしていただいているもののひとつかなと思う。

羊屋…うん（笑）

小山田…報告書に個人の秘密まですべては書けないよね。編集されたもの



羊屋白玉

小山田さんが手掛ける焚き火の今

小山田…焚き火はいま、震災以降、女川町っていうところで小さい焚き火をたくさん作って、遺族の方々や自分の家を失った方が、自分の家があったところで焚き火をして、っていうプロジェクトをやっているんですよ。で、そういうときの焚き火を前にしたときっていうのは、なんかまあ、祈りの場でもあるし、豊かな語りの場として成立しているように見えるんですよ。火気厳禁なんだけど、宗教行事っていうかたちを変えてやったら、もうOKになってるんですよ。送り火・迎え火、そういう風習があった場所ではないんだけど、なんかそれをさせてもらえないか、っていうかたちでやり始めた。今回で5回目かな？焚き火を囲むと、なんかポツポツと、報告できない話の群れが、柔らかい言葉で伝わってくる。それに対して自分は何を喋らなきゃいけないのかっていうのを深く考えるんですよ。ウチの学生たちを連れて、ずっと関わってもらってるんだけど、彼ら何も喋れないんですよ。あまりにも深い出来事で。でも、そういう時間を一緒に過ごすことっていうのが、すごい強い経験として生きて。2、3年くると喋れるんですよ。

羊屋…(笑)

小山田…不思議だなと思う。ちゃんと何か自分の心の中に準備ができるんでしょう。

羊屋…うん。さっき発明っておっしゃってて、そうだと思うんですけどもね、でも、いいことしてるつもりはないんですよ。ちょっと誤解されるときあって。いや、演劇でもいますよ。いいことしてると思ってる人いて、もうほんとに困るっていうか。なんていうんでしょうね…



江古田スープの食卓

小山田…うん、わかる。だからいろんな逃げ口つくつといたほうがいいね。

羊屋…逃げ口。

小山田…うん。たとえば焚き火の場合は、もう焚き火が純粹に好きだからです、とか(笑)

羊屋…(笑) うん。

小山田…それだけは、逃げ口として自分の中で、当たり前にあるんですよ。何でやってるの？焚き火好きだからですよ。それで、人と一緒にメシ食うのも、メシ食うのが好きなんです。その中に、たまたまお互いが持つ喪失感のつかったっていうときがあつて。

羊屋…うんうんうん…

小山田…人様のところに出かけて話を聴いて、一緒にメシを食わしてもらったり、食ったりするっていうのが、まず基本的には、楽しいじゃん？

羊屋…話ができる場所を作ろうとずっとやってるんですよ。だから毎月スープ作ってるんですよ(笑) スープ作るのがどんどん上手になっていって、これはひとつ、成果のひとつなんですけれども、うん。でもやっぱり、「それで？」っていうことになりませんね。

小山田…うん。まあ、だから、助成金をもらっていると、「それで？」をちゃんと書かなきゃいけないからね。

羊屋…うん、うん。

小山田…でも、もし、個人的な生活の活動であれば、べつに「それで？」は必要がない。やっちゃってますからね。

江古田スープについて。小山田さんについて

羊屋…江古田市場のあたりで、スープの食材は買うんです。食材を買う、作る。誰が作るっていうのも、メンバーでやってると今日は僕が作りたいとか、わたしが、とかあったりする。そして、作ってるときに、食べてるとき、っていうときは、やっぱりちょっと、ちょっと宝物がこぼれるときもあるんですよ。それをやっぱり見つけることができるな、とは思って。焚き火も絶対そうだと思うんですけど、それをなんか、ほんとにあの、砂金のようなものですね。うん、つかまえるっていう、そういう場を、これはもう今年で3年目ですけど、でも、毎月毎月スープを作ってきています。

小山田…うん。ウチもよおメシ作るんですよ。実は週二回、最近、公文式の塾をウチの奥さんが先生になって始めたんですよ。で、ウチは一階が喫茶店のしつらいがあつて、その二階を改装して公文教室をやり始めたんですよ。で、一階の喫茶店は、まあ、開店休業中で、そこを何とか維持するためのアイデアとして。で、子供たちもいるし。自分の子供はタダになるんですよ。で、まあ、エエことづくめやん、と思つてやり始めたならそれなりに大変なんやけど、子供たちがドワツと集まってくるんですよ。一階が待合所って、すごい重要で、そこにオレ、非番のときはずっと話してるヘンなおじさんなんです。この日中からいるこのおじさんは誰？っていう。で、終わって帰ってきた子らが、そこで本を読めたりとか自習ができた、遊びができたところ、仕掛けをちょっとずつ増やしている、かなり面白いことになってきてね。公文教室には先生が必要なので、いろんなアルバイトで人を集めるんだけど、昼の3時からかな、夜の7時までなんだけど、その時間帯に動ける人ってじつはそんなにいないんですよ。世の中のお母さんたちも夕方は忙しいです

からね。で、気がついてみると、いま12人ぐらいスタッフがいるんですけど、全員アーティストなんです。時間を持て余してるんですね。なので、けっこうユニークな教師陣で、もう公文の人に怒られそうなんですけど、正解を正解として疑問を持ちながら丸付けをする。面白い状態になって、それが7時に終わると、その前あたりから僕が、十数人分の料理を作るんですよ。で、バイト代が少ないので、ご飯を食べて帰ってもらおうというのをやり始めたら、友だちが来るんですよ。15、6人の、いつも飲み会になってしまふ。それが週に2回ですよ。火曜日と金曜日に京都に来られたら、フラッと寄っていただけると、飲んでます。でも、なんかそういう時に、メシ食いながらいろんな話をしますよね。宝が出てくるんですよ。子供に対しての教育の話から、自分たちの生活の話から、貧乏アーティストのサバイバルの話から、西洋の話から、もういろんな話をゴチャゴチャゴチャゴチャとやって、そこにゲストがやってくる、ゲストが持つてくるある世界の話がどんどんできて。こういうのってこう、生活に組み込まれると、ウチの子供たち、めっちゃめっちゃお得なんですよね。もうつねにへんなお兄さんお姉さんたちがいて、様々な話題があつて、面倒見てもらえて、勉強以外の勉強をたっぶりさせていたでいて。時々、思春期に入ったウチの長男は、そのアーティストの家に泊まりに行ったりとかして、悪い世界をちゃんと教えてもらったりとか。ウチ、テレビもないしゲームもないし、スマホとかも与えてないので、なんかそういう人のところに行く、ちょっと裏の世界が、上手にいただけるといって、喜んで行ったりとかね。そういうのが、生活の中に、いまやつと組み込まれた感じがあつて、すごいいいんですよ、日々、めっちゃめっちゃ忙しいけど。

羊屋…うん、大人だつてそういう場を探してるし。
小山田…そうだよね。だから大人が楽しそうに飲んでないと、たぶんそれは伝わらないと。
羊屋…だから楽しく飲むっていう口実…
小山田…まあね、口実ですけど。でも実際、本当に楽しくないと、見抜かれてるような気はしますので、僕は、僕ら自身がフルスイングで楽しいのを、生活の中に取り入れる方法を、あれやこれや。
羊屋…あれやこれや。
小山田…だから銭湯に行くとかいうのも、すごいいラクな外への開き方で、ウチはもうお風呂たまたまなかつたので、ずっと銭湯ライフなんです。なんか、作ろうと思えば作れるんだけど、同じ投資をするんだつたら、世間とのつながりまでついてくる銭湯に行くっていうのが良くて、行くともう、地域の子供として育ててもらってる状態で、みんながこう、もう女の子はもうそろそろ女風呂に行かなアカンよね、っていう限界を何となくみんなが、なんか上手に作ってくれるんですよ。お父ちゃんと一緒に入りたいたいという娘が、ひとりで女風呂に行つても、まわりの方が支えてくれるので、そういう関係性とか子供が他人の様々なタイプの裸を見ることになるでしょ。必要なことだと思ふし、これ、小学生だつたら150円で体験できるんですよ。

羊屋…銭湯教育。

ご近所さんの許容量

羊屋…自分のお父さんお母さんとも違う、ちょっとへんな大人っていうのがまわりにいると、子供には、すごくいいと思つて。
小山田…うん、昔はね、下宿とかいるんならあつて、何をやってるかわからないお兄さんというのが隣にいたりした。で、そういうところにちょっとしたコンタクトがあつて出入りするようになって、レコードとか、いろんな映画の情報とか、あと、エロい世界とか、いろんなものを上手に、なんかこう摂取できる環境つていうのがあつたんだけど、いま、犯罪ですからね。勝手に知らない子を入れたら、羊屋…そうですね、もともと昔とかだと、ひとつの集落にいたいひとりぐらい狂った女がいたりとか、へんな社会だつた。
小山田…うん、許容量というのがあつた。
羊屋…うん。一緒に生きてたと思ひますね。わたしも、父親のお兄さん、へんな人で。でもそのおじさんにはじめて喫茶店に連れてつてもらつたり、わすれられない。あとやつぱり場所？
小山田…うん。
羊屋…まあ、へんな大人はわたしできると思つてるんですけど。
小山田…ほんとに子供たちに必要なは、そういうリアルな多様性？つていうのが、楽しいつていう記憶と一緒にしてほしいなと、ほんとに思うの。みんな楚々としてるんですよ。すごいいい子たちで。小学生の子たちもね、お父さんやお母さんたちの期待に応えたくて塾に来たりとか。
羊屋…先生が、変な人たちばかりなのに。
小山田…そうね。それなのにね。ものすごく真面目にやる子もいるし。でも、帰り際の挨拶が力がなかつたりね、弱々しく「サヨナラ…」とかいって帰っていくんですよ。大声で「こんちわっ！」つていって



浅間湯

小山田…京都の場合、大人は420円、ああ、430円か。10円上がりました。それなりに高いけど、それを高いと思うかどうかで考えると、僕らではできない教育を、教育っていうか経験を子供にさせてもらってるし、自分たちもやっぱり気持ちがいいんですね。他人の子供に対しての僕らの訓練っていうのが、自然にできるし。だから、もう社会は持つてるじゃん、もともと、そういう場で。でも内風呂になっていくと、どうしても行く機会が少なくなってる。

羊屋…免疫力とかつきますよね。
小山田…うんうん。だからウチの子は平気で裸になりますよ、どこでも（笑）

「繕う」ふたたび

羊屋…どこでも！ うん、わかる。うんうん。そうだ、さつき最初のほうで話していた、繕うっていう話にもどっていい？ たえばわたしこないだニュースで、京都で、水道管がけっこう古くなってきていて…

小山田…そう、なってます。うんうん。
羊屋…それはでも、要するに繕う？ 新しく作るんじゃないで、修理することにお金が出ていくって。

小山田…そう。行政的に修繕費っていうので、なかなか継続的な蓄積っていうのができないというまま放つとかれて、地面が酸性に偏った土壌だと腐食が激しくなって、時々、水道管が破裂したり、それがガス管に当たってガスが止まったりとかいうのが相次いでるんですよ。

羊屋…50年前ぐらいですよ、つくったのは。
小山田…そうだね、ニュータウンを作り始めた時期に埋設したものが、ちょうどライフラインが交換の時期に来てるんですね。

羊屋…水道管って大きいことだけど、繕いの可能性が断たれているわけ

よ。なんかそれは、なんかこう、繕いと呼んでもいいんじゃないかという感じを受けたかな。うん。

羊屋…彼女の繕いは、取手アートプロジェクトへ昇華させてゆくのだと思います。先日も言われました。「わたし、取手アートプロジェクトをほとんど見てきたけど、その一部始終を、墓場を持って行かないで、あなたにぜんぶ話すわね。」って言ってくれましたね。物忘れとかしちゃうかもしれないから、早く話したいの。つておっしゃってましたね。すごいなあ、と。

すね。終わりそうなものをどういうふうにもた始めるか。その始め方とかにも、なんか影響があるのかも、関係してる気がしたんです。小山田…建物に関してはね、最近当たり前のようにリノベーションっていう言葉も使われて、不動産屋さん自身がリノベーションを売り物にしてやる時代になってきて、それも経済に取り込まれた話なんだけど、そういう持続っていうのは、基本的には引き算なんですよ。経済というのが必然的に持つてる使命として、ちよつとずつでも上がらなきゃいけないってことにたいして、持続っていうのは平行、横ばいです。だから、その差し引き分を引き算すると、そうしてもマイナスという見え方になる。その「マイナスのデザイン」を上手に作らないと、と。

羊屋…はい。マイナスな状態、これ以上足さないとか、なにかが減るっていうことが良くないことだという印象がありますよね。それって、仕事じゃないよね。つて、さつきちよつと思っただけです。

小山田…うん。いやしかし、「繕い」っていう言葉は美しい言葉ですね。

羊屋…そうですね。針仕事すぎです。器の金継ぎもやってみたいんですよ。

小山田…日本語としてちゃんと残ってほしい言葉かな。うん。

羊屋…そうですね。だからちよつと、このプロジェクトって、なんか一般的にはマイナスにとられるようなことをやってるって自覚はあります。

小山田…そうだね。

羊屋…はい。

小山田…でもさ。さつきの小林さんのオーラルヒストリーは、あの方は見事に繕われてますよね。自分の悲しみの状況を、ある繕いによって、僕らにとってもズンとくるぐらいなものに作り変えてる感じがある



金継ぎで繕われた蕎麦猪口、2016年未惜しまれつつ閉店した江古田の蕎麦屋甲子(きのえね)より



甲子 (きのえね) の器と江古田スープ 2016



小山田徹×羊屋白玉×安藤仁美

羊屋…そうだ。安藤さん。小林さんの話がでたところで、安藤さん。わたしと小山田さんの話を聞いて、何かも思ったことがあったら、どうでしょうか。

安藤…ちよどわたしがすごく思ってることをお話しされて、それって、塾の話なんですけど、とても面白かったです。

羊屋…インチキな塾ね。

安藤…わたし、同じことを思っていて、ウチも子供の帰り道なので、小さい子たちが寄るんですよ。こないだも「東京スープロとブラケット紀行」のメンバーの全員がウチのお店にいるなかでこれくらい2、3歳の女の子が、みなさんの足をこうやってかき分けて（笑）

羊屋…そうそう。彼女、もう買いたいもの握ってた。

安藤…かき分けて、こうやって裸足で歩いてたんですけど、地域のそういう子たちの集まる、ヘンなおばさんにわたしはなりたくってお店を始めたのもあつたんですよ。

小山田…最近さ、やっぱり表商売っていうのが、だいぶ減ってますよね、個人商店ね。表に向いて開いてるのはぜんぶチェーン店ね、ビルの中に入ってる会社とかは、いったい何をやってる会社かわかんないし、子供たちが下校、学校と家を行き来するあいだに、なんかフッと立ち寄れるような、もしくはつねに子供たちが目撃できるような仕事の現場が、外に開かれてないのが通常になってきているよね。だから、徘徊の問題を話してるときに、徘徊特区っていうのを作れるかどうかっていう話をしてたんですけど…

羊屋…わはは。

小山田…誰でもボケていいと。で、それが可能になるための最大の条件は



羊屋白玉、安藤仁美さん、小山田徹さん

何か、っていうと、お見守りをする人々の存在なんですよね。それが、持続的に可能になるためには、表商売っていうのが実はすごい重要だよ。だから村や街がきつつかあるところは、自営業の人々は表商売をして、つねに外を見ている。だから通る人々の生活形態っていうのはみんな知ってるんですよ。で、その中で異質なものが来たりとか、ちょっと違う行動をし始めた方々に対しての、視線っていうのがちゃんと存在してたんだけど、今はもうずっと閉じた道をみんなが歩かなきゃいけない状態になってるでしょ？プライベートは確保されてるけど、関りが無い。となると、安心して徘徊できないんですよ。

羊屋…おまわりさんも、最近は、交番の前に立っていないですよ。こないだ、池袋の東口の大きな交番をみつけたので、道を聞こうと思っただけです。スマホで調べられるけど、あえて。そうしたら、入り口に電光掲示板みたいな、一目瞭然の街の地図があつて、スマホの地図画面のポスターサイズみたいな。交番のなかにおまわりさんに道を尋ねるチャンスがないじゃないのと思いました。

小山田…焚き火の話もそうなんだけど、昔は下校時ぐらいの夕方になると、道の三角形になった角あたりで、おっちゃんたちがドラム缶焚き火をしてたりとかして、小学生たちが立ち寄ってたって記憶があるんですよ。

羊屋…おじさんたちに、ひやかされたり、あることないこと言われたり。

小山田…そう。坊主、デカなつたな、とか。チンチン毛生えたか？とか。もう言われるんですよ。でもそれって、上手なお見守りの組み込まれ方だったんだろうなと思う。ウチも表に開いた状態の場所だし、社会的な使命みたいなんがついてくるかなと思ってる。だから、ガラクタやさんの中に迷い込んだ子供の、その記憶って、とても大事な

ような気がする。

安藤…大人よりもしつかり判断しますよね。

小山田…数少ないお小遣い、めっちゃめっちゃ吟味しますからね。

安藤…自分の目でちゃんと一個一個選んだものだったりしたときは、ものすごくビックリします。

小山田…コンビニでもの選ぶときにはね、友だちのあいだで流行ってるものを買うんですよ。だから自分の心とは向き合わないけど、こういうタイプの店では、存分に自分と向き合いながらものを選ぶ。

安藤…そうです。亡くなった遺品だったりとか、終わったものが、子供たちの手にわたるって、ちょっと面白い、終わりの始まりじゃないですよ。

小山田…ねえ、奇跡だよねえ。

安藤…それはちょっと感動的というか。

小山田…思わず握手したくなるよね。それ、よく選んでくれた！

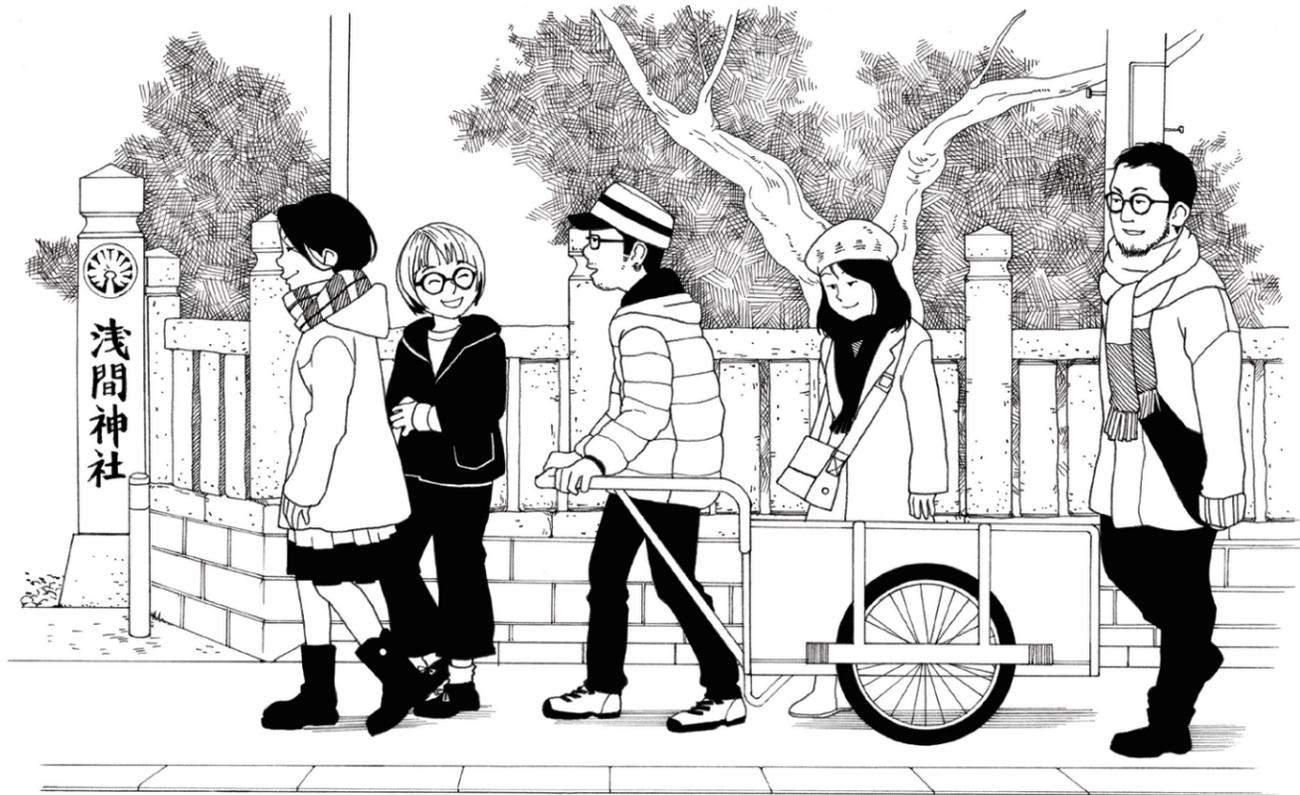
安藤…そうなんです。だから、終わりというよりも、すごくいい空気に、たぶんそのものもどこかに、流れていくかもしれないし。

羊屋…もしかしら、遺品という言葉じゃなくて、受け取った人が名前を新しくつけてとか、そのときに…あの、なんか、けっこうずっと喋っちゃう。

小山田…放つといたらずつとしゃべりますよね。

羊屋…火があるからね。それは、安藤さんと小山田さんっていう「焚き火」があるからね。だから、しゃべっちゃうんですけど。

2017年大寒放談
小山田徹氏を迎えて



2017年大寒放談 小山田徹氏を迎えて

2017年1月29日、江古田、ラクーンスタジオ別館にて

対談紀行2016紫陽花篇で、羊屋白玉と対談した小山田徹さんを、江古田にお招きしました。東京スープとブラケット紀行のメンバーと共に、同じく対談紀行にゲストで来ていただいた安藤仁美さんのお店「ガラクタやネバーランド」を訪れ、江古田の街をリヤカーをひいて歩き回り、街とアートの関わりについてお話ししました。

参加メンバー

小山田徹さん (美術家)
羊屋白玉 (東京スープとブラケット紀行 ディレクター)
伊藤馨 (東京スープとブラケット紀行 アシスタントディレクター)
草椰亮 (東京スープとブラケット紀行 デザイナー)
大内伸輔 (アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー)





西武池袋線古田駅から桜台駅方向を見る

羊屋…小山田さん。ウエルカム江古田です。江古田の街をいっしょに散歩しましたけど、どうでしたか？

小山田…うん。更新されながら生きてる街な感じはするんだけどね。

伊藤…基本、元気な街ですよ。

羊屋…そうなの。

大内…元気な街だけに、古い歴史や、良さげなものなくなっただけの状態でもあるかな。

羊屋…変わるタイミングの渦中かな。

小山田…ある時期に主体だった世代が、歳を取って、便利さを取る。っていう段階に来るやろうな。

羊屋…家賃収入とか？

小山田…家賃収入と、あと、スーパーとか、利便性の高いものを求める。

羊屋…それに真っ向から抗うことはできないのはわかっているんですけども、なんていったらいい…なんか、隙間はあるような気がして。

小山田…この街全体が、一挙に区画整理されたりとかすることがなさそう

じゃん？だから、なんかいい感じに、路地が路地として残りそうないやうな場所かな、とは思わ。

大内…たまに目も当てられない再開発やっちゃうことありますからね、ドカーンてね。

草柳…街の路地が入り組んでるから、フランチャイズのチェーンが入っていけないし、小さい店舗スペースは、面積要件満たしてないから入りにくいっていう、そういう話もあるんですよ。

んですよ。

大内…交番なくなっただけで最近ですか？

伊藤…駅の建て替えが終わった時だから2008年。

草柳…いまは、駅の下にあるよね。

伊藤…踏切の交番っていうイメージだったんだけどね。

羊屋…そうだったね。

伊藤…うん。昔は、その踏切のあたりは、北口も南口も、飲み屋さんが今よりもっと多くって、だから、あそこに交番があつたんだと思うんだよね。ゴチャツとしたところだったんだよ。なにかと、よくお世話になったな。

小山田…やらかしてんな。

草柳…やんちゃやってたね(笑)

小山田…そこで、このリヤカーだけど、江古田のまちなかで何かをしよう？

羊屋…はい。このリヤカーを、江古田の街で放牧して遊牧してみようかな。と、思ってます。このプロジェクトの立ち上げと同時期に、江古田の台所とも言われる、江古田市場が閉場する噂を聞き始めたものから、暇さえあれば市場に向いて、市場で働く人たちのお話を聞いて、2014年末に市場の終わりを見届けました、わたしなりに。「人や物事の終わりと始まり」が、このプロジェクトの大きなテーマなんです。江古田市場は戦後のどきどきの闇市スタートです。なので市場の始まりは、食べ物や物資や人々を積んだりリヤカー

小山田…あとはこれから、物件の値段がどんだけ上がるかだよ。だから若手の人々が小商いをチャレンジできる値段なのかどうかによるよね。

伊藤…江古田はそういうお店が多いですね。若手の人たちの小商いが、ポンポンって、新しく入ってきて、駅前にすごいたくさんあって。だからこ楽しいんですよ。

小山田…地価が上がらないことを願うね。これ以上。

羊屋…あとは江古田駅は、西武池袋線の各駅停車なんですけど、もし急行が停まる駅になっちゃったら？ そういうのでも、街って変わりますよね？

小山田…うん、変わる。

伊藤…停まらなくてほしい。

羊屋…急行が停まったら駅ビルとかできるのかな。あ、踏切もなくなっちゃうかもしれない。踏切、大好きなんです。

小山田…好きでんな。滞留時間っていうのが、強制的にあるからね。ついつい眺めちゃうもんね。

羊屋…うん。二つぐらい踏切を待たるときあります。ぼーっと。

小山田…ほんまいうと、ああい踏切の横ぐらいに、ちよつとした空き地があつてき。そういうところで、軽い感じの定期的なイベントとか、店開いたら、図らずも足が止まっちゃうよね。

草柳…踏切で足止めされてるのに、更にね。

小山田…必ず見てつてくれるよね。

伊藤…あの土地、誰の持ち物なんだろう？区かな？以前は、交番があつた

が街にあふれていた光景なのではないかという想像から、リヤカーへの強烈なノスタルジーつてのもあつての行動になるかと思えます。あと、アートプロジェクトつて街に拠点を置き、その場所を開いてゆくというお決まりごとがあるとも聞きますが、だから、アートプロジェクトビギナーとしては、江古田で拠点みたいなことも考えてたりしたんですけども、この街を歩いてるうちに、江古田の多様性みたいな、多義性みたいなところを大事にしたいなと思いつきました。ということは、この江古田の多様多義の波をわたしたちが泳げばいいんだ。つて思ったの。だから遊牧です。わたしたち3年間、江古田の街で買い物をして、その食材でスープをつくって食べるってことを月に一回、なのでもう30回以上続けて来たんですけど。だからスープ作りの手際はかなり上達しまして、儀式といつてもよいくらいのレベルです。そして、これからは、スープの食材集めにリヤカーひくわけだから、交通って問題もあるし、食べ物っていうことを考えると、実現までに、いろんなハードルがあるんでしょけど、東京だと、どこの街でも許可の問題は、避けられないこと。焚き火もおいそれとできないです。なので、街でリヤカーを引いてスープの材料の買い出しをして、もしかしたら路上で料理もして会食するかもしれないということになると、どういう問題が起きて、それに対してどういう交渉をして、出来上がったのか。はたまに失敗したのか。つてプロセスも残したいなあ。

小山田…その江古田のこの多様性っていうのって、さっき一緒に江古田の



リヤカー組み立て中

街を歩いてたらさ、駅を中心に商店街が放射状に何本かあって、それぞれに個性があるじゃん？

羊屋.. そうなんです。

小山田.. なんかそういうところそれぞれに、道路交通法とかさ、もし何かの商売をしようと思うと、けっこうややこしいのよ。もう絶対、認可は下りない。でも私有地でやるんやったらOKが出るのよ。あとは保健所の問題だけ。だからなんかそういう拠点みたいな関係性をいくつか作って、「その月の何日の日やったらその駐車場、OKよ」とか。

羊屋.. うんうん。

小山田.. そういので、場を開くっていうのは一つの方法かな、とは思うなあ。なんか路上で引きながら何かをしていくとなると、実は、引き屋台というのは、もう認可を下すところが全国でどこにもないのよ。役所の中にも窓口がない。だから現在やれているのは、法律ができる前にやってた人々の一代限りの既得権というのが許されていて、そうじゃなかったらもう車にするしかないんだよ。

羊屋.. 自転車扱いですか？

草柳.. 軽車両だから自転車だと思う。

小山田.. そう自転車。ただ自転車は難しいのよ、商売をするのが。でも車だと車両なので、道路交通法に準じて商売というのが認められるねんけど。なんか、不思議な時代やね。

羊屋.. うーん。

小山田.. いちばん手軽にできるはずのものが、ハードルがいちばん高く

なあって、けっこう資産を突っ込まないとできない車での商売のほうが簡単。

伊藤.. 石焼き芋は、移動販売をしてるんじゃないかって、たまたま車で走って

いるときに、お客さんに呼ばれて、その場で売ると。

小山田.. 停まってますってことだね。

草柳.. あ、そういう体なんだ。

伊藤.. 移動販売をしているわけではない。

羊屋.. 石焼き芋、そっかー。

伊藤.. あれば法の抜け穴なんだって。

小山田.. 物干竿も。

羊屋.. なるほどー。江古田という街を意識的に歩くようになって、知り合った街の人たちと、ちょっとだけでも、できてきたお付き合いは大事にしたいんです。でもいつも思うんだけど、興味を持ってくれる人とは、まあ、お話も弾みますけど、興味を持ってない人たちに、どれぐらいの距離感で、どうやってその距離を縮めてゆけるのかな。って。これは、まあ、演劇でも、何をやっても打ち当たる悩みというか、いまだ解決できないことです。で、勿論、解決できないことに取り組むのは望むところなわけですが、だから、興味のある人は、見てもらう側から、そのままちょっと動くと、もう参加する側にスツと入りやすいんです。でも、興味のない人たちのアクセスって？と、いう丸腰状態から、どこまでできるかなって思っているんですよ。わざと、ハッキリしたビジョンは持たないように押し付けられないようなスタンスで、いろんな交渉や、江古田でちょっと



富士の湯跡地にて

と関係ができた人とのやりとり、ほかのアートプロジェクトの人が訪れてくれたり、つてことが、並行に進んでいって、このリヤカーのまわりに人の輪ができて、みんなで作ってみんなで食べて、銭湯入って終わるみたいな何日間がきたらな。という感じなんです。

小山田…ほんまにいま言うてたけど、興味のある人とつながるとかいうのは簡単にいろんな手段でできるんだけど、そうじゃない人と、つていうのはほんつとに難しくてさ。「アートプロジェクト」であるつていう段階で、多くの人は信用しないのよ、関係性を。

羊屋…うんうん。なんか予感してました。だからずっと私も、東京スープとブランケット紀行です。つて、声高に名乗ってこなかったの。

小山田…うん。生活の中でやつてることやったら、徐々に理解してくれることはあるんだけど。アートポイント計画の方を前にしてあれやけど、「アートプロジェクト」つていうのが、いろんな地域でいろんなことをやってんねんけど、絶対定着しないのよ。で、その過程で、ドロップアウト、スピンアウトしたりして生活に入り込んだ人たちが持続していることがあって。その手法はべつにアートじゃなかったりするやん。子供ができて、学校の友達、関係ができた瞬間に、お母さん連中と何かが始まつたりとか、おやじの会が何かに変わつたりとかするようなもんで。商売も、本気で商売し始めた瞬間に、やつとお隣さんが声かけてきたりとか。

ね。なので、もう、無言でリヤカーをひきます。

草椰…街へ出る。と。

羊屋…うん。

伊藤…それで、街、歩いてると、なんとなくわかんと思うんですけど、国境扱いなんですよ、ぜんぶ。

小山田…うん。

羊屋…国境つていうのは、区界つてこと？

小山田…まあ、エリアだよ。意識しているエリア。

大内…実測よりも、自分の気持ち的には、我が街つていう。

羊屋…うんうん。

小山田…ここ、学区みたいなものつてあるの？

大内…そうですね。小学生のころはよく思いましたね、学区つていう。

小山田…京都も、プロジェクトやるときに気を使わなきゃいけないのが、その学区なのよ。

伊藤…やつぱり。

小山田…うん。街名とかではなくて、京都人は学区でみんな区分けをして。学区が違つと、ほんとに関係を持たないのよね。

伊藤…学区の違う小学校だと、隣はよう知らんみたいな。

小山田…うちは、公文教室をやり始めてから、そのことがすつごいわかるようになってきて。んで、なんか学区またいで来てる子とかが出てくると、面白いことになるのよ。

羊屋…ああ、越境者が。

草椰…山があつたり川があつたりするわけじゃないんですけどね、うん。

羊屋…江古田の街で拠点探しした時、一瞬あつて、面白そうな場所見つけたから、不動産屋さんについてみたんですよ。さすがに、目的は、アートプロジェクトの一貫でとか、言いましたけど、練馬区から助成は受けているの？とか聞かれて、中身よりも、そういうところが気になるんだなつて。

小山田…だからまあ、アートプロジェクトの大きな問題点なんやと思うんやけど。

大内…それは実績として回収できればね。「アートポイント」を卒業した人たちも、なにか更に新しいことをするつてなつたつていうだけで、ずいぶん実績な気はするんですよ。我々の役割がなかったら、そういうふうにも思わなかつたのかもしれないし。

小山田…うん。だから目的が実は違うんじゃないかと思うの。その未来の経験を積むための現場であつたりすることが、実は主目的で、街づくりを行うつていうのは、長期的な話であつて、そんな短期的に主目的にするべきもんじゃないのかもしれないなあ。と、思うよね。

羊屋…「アートプロジェクト」つて名目があつて動き始めるほうが、さくさくと早いかもしれないけど、実は遠回りをゆくしかないとつてことはわかつてきました。でも「わたくし東京スープとブランケット紀行のものです。」つて言い出すタイミングが、いまだにつかめないですね。初顔合わせで言えないなつてことは、本能的に始めたころわかつてたの、なんか関係が壊れそうな気がして。だから、自分の気持ちでやっていることだけに絞つてゆくと、それは最初は江古田市場の閉場問題でしたけど、そこから、なかなか、進まないんですよ。

羊屋…うんうん。

草椰…なんでしょう。この街の方と話してますとね、世代がだいぶ上の方でも、まだ小学校時代の関係性を持ち続けているのがよくわかるし。だから隣の小学校なんていうと、きつと、番長も違うし、猿山じゃないですけども、鳥意識みたいのがあるのかなと。

小山田…でもまあ、どこでもそうなんやけど、隣同士は仲が悪いね。それほどの団体もそうなんやけど。でも、飛び越えると、ま、付き合えたりするのよ。

羊屋…東京の23区つて、まだよくわからないけれど。いま思うのは、その23区がユニオンとして考えられた場合、ほとんど地続きだし、設立当時のEUみたいなものかなーと思えて。それで、江古田というのは、港区とか新宿区みたいな中心地じゃないけど、EUでいうところの、本部ブリュッセルの要素がある感じがして。江古田が本部でいいんじゃない？つて。本部決める時に、けつこう気を使つたつて聞きましたよ。ドイツとかフランスの大きい国のどこかの都市を本部にするんじゃないかと、権力が偏らないように。だからベルギーのような国の、多言語、多民族な、カオスな。

小山田…EU諸国のなかの、民族の交差点につくつたのよね。

羊屋…そう、そうなんです。だから、そういうのもあつて、ほかの区でアートプロジェクトやっている人たち、ちよつと越境して来てもらいたいなつて思つたり、わたしも越境したいなつて思つたり。やつ



小山田徹さんと放談中の「東京スープとブランケット紀行」メンバー

ぱりオリンピックは意識せざるを得ないことで、すでに細かくいろいろなのは始まって。それに便乗して、リヤカー遊牧競技というか、儀式というか、奇祭というか、お先に、始めちゃおうかなとおもっています。東京2020オリンピックって、いろいろまあ調べたり聞いたりすると、イーストロンドンも見てこようと思ってますけど、今の状態って、スポーツの祭典だけはないのですね。そうなると、ひっそりと街に出て、もくもくとご飯を作り食べて、静寂のなかお風呂に入って、肅々と片づけて家路に着く、ぐっすり眠るみたいなことも、どうしようもなく来るべきオリンピックの前座でいいんじゃないの？と。でも、これに興味をもつ人たちが世の中にどれぐらいいるかも、まだぜんぜんわかんないんですけれども。

草椰..うん。さつき小山田さんがおっしゃった、アートプロジェクトと生活っていうことのかみ合わなさ。それって例えば、食事ってまさに生活をする基本じゃないですか。今の生活っていうのは、誰かに委ねちゃってる、たとえば地元の商店で買い物をしないで、ショッピングモールに買い物に行ってしまう。特に江古田はそうでもないんですけども、とくに地方なんかはそういう状況があって、自分たちのすぐまわりで生活を成立させるように、たとえば街の商店から買って支えるみたいなことをかかってやってたはずなのに、大型の資本やら、そういう仕組みのほうに、譲り渡しちゃってる状態があるのかな、と。でも、それがほんとは自分たちの身のまわりできっち

小山田..うん、だから、でもまあ、ね、東京スープとブランケット紀行もそうなんやけど、たとえば月一で、みんな飯を食おう、っていうのを、どんどん大つきくすることも可能といえれば可能やん？

羊屋..うんうん。
小山田..もつと食べに来てよ、とか、もつとみんなで作ろうや、とか。月一、大食事大会、朝から晩まで、来れる時間帯を、うまいこと設定するつてのを、拡充していくつていうのは、会社勤めの人には負担が大つきいよね。

羊屋..そうですね。
小山田..でもそういうときに、アーティストとか、ま、学生とか、地面からちょっと浮くことを許されてる人たちでそれをやっちゃまうつてのは、ありだと思ふよね。

羊屋..わたし、ちよつと逆さまなことを言うんですけど、わたしの主催する「指輪ホテル」での作品の中では、衣裳とか照明とか、非日常である演劇を構成する要素の中に、食べ物もはいつてたんですね、始めたときからね。だから、アートとか、演劇の要素の中に、もうすでに食べ物があった。で、この発想が、何回かねじれたあげく「東京スープとブランケット紀行」に置いての食事のあり方っていうのかな。スープって限定したのは、わたしの猫が死んだときにこう看病してるのを気遣ってお友だちがスープ持ってきてくれて、最終的にみんなその猫を弔った。つてところから繋がっているのだけ

り成立していれば、必要ないはずなんですけど。

羊屋..ライフ指南みたいな情報も多過ぎだよな。
草椰..そう。情報も然りで。その生活の基盤になる食事を作るだとか、そこに住んで衣食住をまかなうつていうことが、どうもこう人の手に渡っちゃってる状況があるな、と。じゃあそこから先、アートのプロジェクトでやりましょう。つてことが、その生活っていうものを、取り戻しましょう。つてことに、合致できるのかなつて。

小山田..うん、アートであることの有利さつていうのがさ、アイデアの自由さ？つていうのが保証されてるのよ。アーティストが提案することは、まあしゃーないかと。

草椰..しゃーないか(笑)
伊藤..免罪符みたいなもの。

小山田..うん、あと、その業界では、その方法は絶対とらないけど、色んなアイデアが提案できる立場つていうのは、素人だからできることをやつたりとか、部外者やからやれることやつたりとかいうエリアに、ちよつと近いような気はするのよね。だから、地に足の着いた生活者だつたらできないことなんだけど、ちよつと浮遊している人だから、なんか提案して無茶ぶりやつてみたりとか、できることつていうのがあるような気がする。

羊屋..アーティストとして。しかもその土地に初めて来たストレンジャーなアーティストとしてという立場だと、その分、踏み台というか、厚底靴をはかせてもらえてる感じはします。その土地の人が受け入れてくれたときはなおさらに。

ど、それだけじゃなくても、食べ物に関しては、あれもこれもと、自家中毒が起きてますね。更に、なにかのきつかけの際に、「一緒に食べましょう。」に対しては「そうね」と言ってくれやすいです、疑いなく。それがちよつと怖いんです。

伊藤..そういう意味で、テーマとしてすごく扱いづらいものだつて思ってます。非日常性が高いものを扱っていると、アートですつて言う踏ん切りがつきやすい。

羊屋..そうですね。なぜだろう。
伊藤..みんなで商店街で買い物をしてスープを食べてつていうところの 아트プロジェクトつていうとね、とたんに非日常性と日常性がな いまぜになるし、江古田でやるつてなつたら、どこにもターゲットがいないような気がして、誰も来ないよなつて。じゃあ自分が行くのかな？知らないやつがやつてたら絶対行かないしな。つて思つて。どうしたらいいんだらう？つて、僕の「江古田住民としての困ったな。」がある。たとえばアフリカの民族音楽をそこでやる、つていつたら聞きに行くと思ふよ、たぶん面白そうだから。みんなでスープを作つて食べましようの会とかつていわれると、ちよつと悩ましい。

羊屋..それもああるね。
伊藤..大ジャンベ大会とかだつたら、ちよつと楽しそうじゃなか。
羊屋..まったくスペシャルじゃないよね。つても日常。
伊藤..そうそう、お祭りは作れないよね。
羊屋..いや、お祭りにしたくないしね。

伊藤…うん、だからそれを嫌ってる以上、すごく難しいお題をいま…

羊屋…そう、あとは、ケイちゃん(伊藤)が、さらに、江古田斎場でやるうって。

伊藤…もう終わりから始めたらいい、と。

羊屋…斎場という、現代のお弔いの場合は、システマティックになってるのかなとも思うけど、やってみたい。

伊藤…結婚式もシステマティックなように見えるんだけど、運営をする人たちはちゃんと人間がやってるし。

小山田…人間がクツションだからね。

伊藤…そうそう。

小山田…まあ、あと、ほんまに、なんかいろんなものが分業化されてるからさ、ありがとうを言う相手が、その瞬間にいなかったりするのよ。だからもう、家作るのにしてもそうじゃん。もうこの壁紙を貼る人、ペンキ塗る人、電気つける人、もうその仕事が終わったら行っちゃってるから、完成と一緒に喜ぶことなんてないのよ。で、その人たちに電話が来るとしたら、クレームしか来ない。ありがとうって、僕らはほんとはね、そこに一緒にいたら、「おお、きれいに貼れたね、ありがとう」って言うはずなんだけど、だから、まあ、すべてがフランチャイズになったりとかすると、誰が責任者か、もうわからんままだし。個人商店はそれがまだ可能なんよ。

羊屋…うんうん。挽肉ください、っていったら、こうウイーンってミンチにするとこ、見ながらさ…

小山田…あれ、俺のやつをやってくれてると(笑)

てことじゃないかな？ わたしたちが先に「この体験」をしたから、どう？って伝えることはできると思うので。

羊屋…いいな。まだ知らないものについて、みんなで話すの止まらないのって。それでね、まだ見ぬ「この体験」ってのは、江古田という街に「東京スープロとブランケット紀行」の考え方のフィルターかざしてみたらかうなった。ってことだと思っんです。そして、だれかが我が街でもやってみるかな。って酔狂な方がいたら、この子(リヤカー)出張してもいいし。新しいフィルターができるかもしれないし。日本だけじゃなくて海外のほうができたりして。

羊屋…そうそう、やってきてる、と思って(笑)

大内…仕事してる側が、自己肯定感を得られないっていうことになってると思うんですね。だから、最近はいろんなところで働いてる大人たちも、なんかどこかで…

小山田…どこかで、分断された…

大内…ギョッと、やったぜ！って瞬間はないっていう。

小山田…で、それを総出でなくしてしまった世の中なんよね。効率のために。あと、責任の分散と。だから、まあ、こういう個人商店街がまだね、残ってるエリアっていうのは、ほんとはそれが街の決め手なんやと思うねんけど。だからそういうところを、どうつなぐのか、どう体現していくのか、もしくは、どうアピールしていくかが、ミソかな、とは思う。

羊屋…それでさ、わたしなんか下が古本屋で画材屋で、居酒屋さんがあって大学があつて、外に降りて、外界に出てすぐ見るものが、ほんとに、いや、ほんとパラダイスって思うんだけど、何か問題がないとアートプロジェクトってできないんじゃないかな

大内…江古田の方たち以外の方たちに来てもらえたらよいか？

羊屋…んー。

大内…「この体験」ができるのは、ま、江古田ぐらいなのかも、とか。

羊屋…「この体験」って、わたしたちもまだ未体験ですけどね。

大内…うん。そう。まだ見ぬ「この体験」ができる空間があるかないかっ



江古田駅南口に突如あらわれた干し柿屋さん

小山田…でもまあ、そうねえ、例えば、駅を中心にこう、クリッと円を描いて、そのサークルを三分の一ずつ回るだけでも、ぜんぜん違うよね。

羊屋…そう全然違うの。わたしは江古田生活、路上で長らく迷ってましたから。

大内…長らく？

羊屋…放射線状がわかんなくて。こっちに行ったら戻れなかったりとかしてた。今でもちよつと怪しい部分はあるけど、放射線状っていうのが…

小山田…まあ、放射線状としたら、まあ、東京の街と一緒になんやけど、環状線っていうのを作らないと、横のつながりって作れないのよね。

羊屋…バリとかアムステルダムとか、放射線の街を闊歩する憧れあるかも。

碁盤の目の街で育ったので。

大内…まずは江古田の街を闊歩して。

小山田…うん。みなさんがやってる活動というのは、環状線をどう作るかっていうことやと思う。

草椰…そうそう、駅を中心に放射線状の商店街があつて、そこに、江古田環状線を編み込んでゆくみたいなの。

伊藤…江古田には、グルッと回る道路がないからな。

小山田…それを、勝手に作ってみたらどう？この家庭と、このお店とって。

草椰…はなしとんでいい？

伊藤…いいよ。

草椰…縄文時代、どう暮らしてたかみたいなこと、こないだも白さん(羊

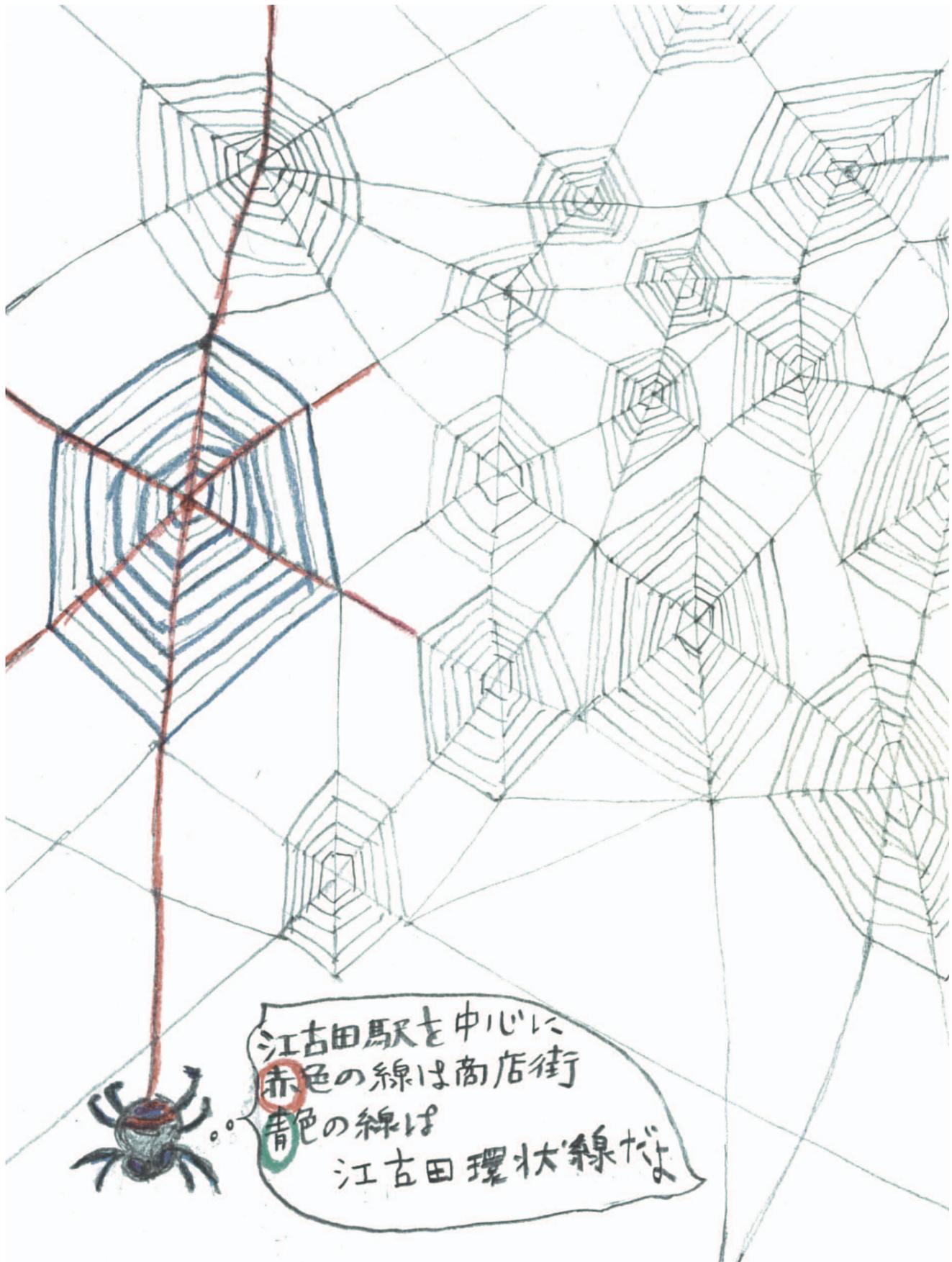
屋白玉)と話したんですよ。

羊屋…よくするよね。止まらなくなるね。

草椰…縄文時代は、狩猟採取ですから、たとえばこの川に行けば、魚が捕れるとか、その向こうの林に行けば木の実が採れるとかっていつて、その場所所に行けば、日々の糧をグルッと回って得ることができたっていう話。それを東京の街に置き換えてみても、同じように生活してるんだと思うんですね。たとえばその肉屋に行つて買い物する、八百屋に行つて買い物をする。

羊屋…採取生活。

草椰…採取生活。狩猟ではないよね。





浅間神社を脇からのぞく小山田徹さん

小山田…いいじゃん、それ！江古田採取生活っていうのを立ち上げたら？

羊屋…わ。そんなこと言われたら、真に受けちゃいますよ。

草柳…真に受けよう。

羊屋…そもそものは、わたしの幼稚園時代、アイヌのコタン（集落）のすぐ近くに住んでて、それで、彼らはかつては狩猟採取だから、湖があるぞ、森があるぞ、って。だから、まわりにはいろんな木の実や、獣も魚もいるぞ。食べ物には困らないぞ。で、コタンができたんだらうなって話から。

小山田…認識エリアつてを作ることだね。

羊屋…で、もうひとつ、新潟のほうに「なじよもん」っていう縄文の博物館があって、そこは縄文火焔型土器がいっぱい発掘されるころなんですけど、縄文の集落を再現してるんですね。家の玄関は真ん中を向いていて、真ん中には、お墓なんですわ。

小山田…お墓。うん。

羊屋…江古田は、真ん中はお墓じゃないですけど、江古田駅ですけど。

草柳…中心は駅だな、なるほど。

羊屋…それで、わたしがなぜ採取生活がしくりくるのかというと、わたし農業ができないから。土に鍬を入れると、土が泣くような気がして。

草柳…白さんは「わたしは縄文の人だ」って言ったんですよ（笑）

羊屋…お友だち同士で畑をかりてみたり、頑張ってみようとかって思ったんですけど、畑のこの畦を作るのに、やっぱり土に鍬をいれられなくて、何回も挫折してるのね。ここに植わっているこれを少しいただくわみたい。これがしくりくる。かといって、イチゴ狩りと

か、獲り放題とかって、萎えるんですけど。っていうことを都市生活に置き換えたんだよね。

草柳…要はその、なんでここに住んでるかっていうのが、僕はもうちょっと都心のほうに住んでるんですけども、ちょっと希薄だなんて思ってるんですね。

伊藤…そう。草柳君が引越したんだけど、そこにぜんぜん馴染めない話から始まって（笑）

草柳…馴染めないんですよ。その前にいた街は、かろうじて近所に肉屋があって八百屋があって、パン屋があって。

羊屋…うん。あった、あった。

草柳…ミニマム商店街みたいなのが目の前の通りにあったんですね。それで足りてたんだけど、今の街は大規模再開発が始まっちゃって、かつてあったお店屋さんが、移転したり商売廃業したりして、だから、事足りないんですよ。今の街では採取生活すらできないんです。なぜそこに住むのかって理由付けが…

羊屋…なんか、ここに住むという理由が、双六あそびみたいな人たち多かったよね。今もそうなのかな。高円寺あたりからスタートして、代々木上原から、西麻布とかって、街のブランドの序列双六みたいな。

伊藤…あがり。っていう（笑）

羊屋…そう、あがり！って。なんか演劇の現場でもそうですよ。下北沢の小劇場ぐらいから始めて、最終的に、パルコ劇場。はい、あがり！って、制覇してゆくような。作品と劇場がマッチしているのかどうかをまるで考えてない。

羊屋..それでね。街の中に放射線と環状線つないでいくっていうのと、その後におっしやった採取生活って、なにか関係あると思います？

小山田..ええと。まず、狩猟と採取は違うんよ。それはまあ、ジェンダーもからんでると思うんだけど、まあ、担うものが違うというか。

羊屋..狩猟より採取がむいているかも。

小山田..うん。狩猟は、サラリーマンが会社に行くのが狩猟なんよ。狩りに行って帰ってくる。それには情報も必要だし、機敏な目配せも必要だし、特殊な言語も必要なの。採取は、古代から女性が担う文化やって、それは観察の文化なんよね。観察と記憶と伝承。で、農業の最初の礎いしづえでもあるんやけど、自然観察をして、この時期には、ここどんな食べ物があるのかって、出来事や記憶を共有していく。だから構造的な地理を理解するより、出来事記憶。それも女の人っぽいねんけど、もうこれ言うたら怒られるけどね、今は。

羊屋..そうなの？わたし、出来事記憶で、街歩いてるかも。

小山田..うん。女の人と場所の話をするとき、ほら、こないだあそこで待ち合わせしてご飯食べたところを、ちよつと行って、あ、でも、ハンカチ落としたところあったやん。って、それは出来事記憶で土地を理解してんねんけど、男性やったらさ、200メートル行って右に入って3本目が信号やからって。

伊藤..わたし、まさにそれです。

小山田..女の人たちは、それを情報として共有できるの。他者の出来事の有る出来事も記憶するし、不幸だった記憶も蓄積してしまうの。

羊屋..うんうん。

小山田..だから、記憶の箱には、嫌な出来事から入ってるから、記憶をさ

ねんね。もう、どの女の人にも。

草椰..平日の夕暮れ時、僕らは江古田の街を歩くことがあるんですけど、自転車で子供を後ろに乗つけてるお母さんをよくお見かけする。平日の夕方って、お母さんたちは、晩御飯の準備しなきゃいけないから、あっち行ってこっち行って。彼女達を追跡すると、きつと、採取のルートが...

羊屋..尾行したいな。

小山田..そう。採取のルートが。しかも、物資を自転車に積む順番とかね。

最初でティッシュ買ったかわらない、とか(笑)

草椰..重いもの後でしょうとかね。

小山田..だから、時代がこうやって進んでくると、お母さんたちは、越境してる可能性があるよね。

羊屋..おおいにありますね。

かのぼると、あの時、あの人は、ああ言った。って、嫌なことの記憶のほうが重要なのは、たぶん採取民族の重要なポイントやったんやと思う。

羊屋..同じ失敗しないためにね。

小山田..そう。あの色のものを食べた腹を壊したっていうのは、命に関わるサバイバルの方法やと思うねんね。だから、そういう出来事記憶の集積のさせ方っていうのは、往々にしてその地域差はあるけど、循環型の通路を作ってるって、採りすぎないし、滅ぼさないし、均等に得てゆけるから、円環地図が必ず採取活動には入ってるんよ。

羊屋..自分が間違ってしまった記憶を持ち続けるって消極的才能って言うんだそうですけど、でもそれで身を守ることができる。

小山田..そう、それに無駄なく、お買い物ルートを巡って、その時に必要なものを全部手に入れて、帰宅するのは女の人。男は見つけたものをどこまでも追いかけていくから、ものつすごい無駄をして、しかも、同じ道を帰ってくることもある。無駄だらけ。だから、放射線の、もしくは、鉄道網とかね、交通網ってぜんぶ放射状にいろんなところに繋がるんやけど、それと、生活圏内を結ぶ動きをつくるのに、環状線がある。

羊屋..うん。無駄のないルートで買いたいものして帰ってくると、ちよつと達成感ある。誰にも言わないけど。

小山田..男は、出合頭の店でも、そこでぜんぶ買っちゃったりするやん。もうここでええやん、とか思って。だから、買い物計画で、うまく循環ができるっていうのは、女の人の生活感には内在してると思う



江古田駅の踏切で足を止める、お買い物中のお母さんたち

草柳…うん。男の場合は、仕事場が遠くにあつて、帰ってきて寝るだけの
場合、それって、狩猟ってこと？

小山田…そう、狩猟。現代の狩猟。

草柳…現代の狩猟か。

小山田…銭つていう獲物を捕りに行くわけだから。

羊屋…うんうん。

小山田…だからそういう意味では、お金は、狩猟してシェアされてる。

伊藤…昔の狩りはさ、狩りに出かけること自体がある程度楽しいわけじゃ

ない？

小山田…いやあ。たまらなく楽しかったと思うよ。それぞれが、獲得した

喜びでね。女の人は女の人で、一緒に採取に行ったりとか、収穫す

ることが楽しかったりとかするようになって、そうやって、つくり

上げたんやと思うんだけどね。

大内…チームプレーじゃないと獲れないっていうのも事実だよ。

羊屋…うん。狩猟採取でも農業でも、わたしは農業に

関しては、恩恵にあずかるしかないんだけど、

それらの共通点つて、年に一回しか収穫がない

てこと。植物も動物たちも季節の中で育つてい

く。季節、シーズンつて、現代に置き換えると、

けつこう壊れてきてるといいうか、季節感がない

から、いつでもなんでも手に入る。

小山田…農業が登場した瞬間に、蓄積とか備蓄ができるようになるんよね。

採取民族つて、冷蔵庫を持たない現代人みたいなもんやん。その日

食べるもんを獲得して、その日に消費すると。

羊屋…保存することもあるけどね。燻製にするとか。

小山田…そうね。農業で、本格的に蓄積・分配というの

がされるようになるよ、貨幣経済の土台なんや

けど。何かを失うんよね。

羊屋…うんうん、そうかうん、そうかうん。農家の人のほんとに、一年に

一回しか試せないっていう…

小山田…どんなに長くても人生で60回しか実験はしない、できない…

羊屋…そうそう、限界があるなかで、美味しいものを作るつてさ。

大内…基本的に近くで取れたものが食べられればいい

んですよ。

草柳…そうそうそう。

小山田…ほんとはオーガニックでやっていくと、サイクルつていうのが

はつきりするんだけど。

伊藤…東京には、ほとんど、農業がないからね。

大内…でも練馬区はあるほうでしょう？

伊藤…23区の中で練馬区は一番目。僕んちのもうちよつと西側に行くと、

昔はね、キャベツ畑ばつかったの。あとニンジン。それから、大

根。

大内…練馬大根。

伊藤…そう。あとゴボウかな。このへんは、根野菜が、主要産物だったみ

たい、江戸時代まで。

羊屋…今もう住宅地になつてるの？

伊藤…なつてるけど、まだ農園は残つてる。

小山田…ポツポツ残つてるんちゃう？

草柳…住宅の奥のほう行くと、スコーンと抜けてて、畑になつてたりする

ところはまだまだありますね。

小山田…畑が残つてる。

大内…家にするよりまだ商売になる、というより、意地になつてる？

伊藤…農地のほうがね、税金がかからないんだよ。

大内…あ、そっか。

伊藤…生産緑地を作つて、農業を何とかしようとしてるんだと思う。

小山田…まあ、ほんとはなんかそういう農家とダイレクトにつな

がるんことが都会のサブイバルやとは思わねんけ

ど、それを直接やつちゃうと、商店が潰れるや

ん。

草柳…そうですね。

小山田…だからほんとに商店がそういうところと結びついて、そこに買い

に行くつていう循環がうまくいくのがいんだけどね。

羊屋…うんうん。

小山田…うちの田舎は兼業農家やつたんやけど、もう農業で生計立てるの、

だいぶ前にやめてさ、自分たちの家で食べるものしか作らない。つ

てなつた瞬間、完全無農家なのよ。子供たちにも、米も野菜も送っ

てくるからさ。

伊藤…ああ、いいですね。

小山田…すごいありがたいんだけど。もう親は、体力的に米づくり無理や

な…って頃、たまたますぐ近くの若者が借りてくれて、その米を

分けてもらつてているの、借地代のかわりに。

伊藤…年貢。

小山田…最近の米は、無農家でもめっちゃ美味しくなつて。



炊飯中



5月、栄町本通り（ゆうゆうろーど）の入り口

小山田…うちは、一週間に二回は、集団食を、毎回俺、作るんやけど。公文教室の賄い担当だから。で、待合やっていると、ずーっと料理してんの。そしたら、まあほんまに面白い効果があつてさ、男の人が料理してるっていうのを、なんか一般のお母さんたちは、あんまり見ないみたい。うちのダンナはやらないと。だから俺見てカルチャーショックを受けてくれるねんな。

伊藤…ああ。
小山田…で、孫を迎えに来たおじいちゃんとかは、わしゃやったことがない！と。

草椰…男子厨房に入らず、と。
小山田…うん、で、「最近、やらなアカンよな、っていうのは、何となく感じてんねんけど（笑）まだやったことがない」とか、おじいちゃんがいいたら、「ほな味噌汁、一緒に作りまひよ、みたいな。簡単でっせー、ご飯も炊きましよう」とか言ってみたりしてね。

羊屋…うんうん。
小山田…そんな時も、届いた米は、うちの公文教室のスタッフたちの賄いに、ガンガン使われてて。

伊藤…買ったらすごい値段ですもんね、無農薬米。

小山田…一週間に二回やからさ、飯食うっていうのが。毎回12人分ぐらい作って、みんなが食べに来るんよ。

伊藤…12人：けっこう食べるでしょう？

小山田…うん。で、うちの子供まで入れると、けっこうな数やから、毎回、10合とか、一升炊き…

草椰…一升炊きですよ、もうそうなるよ。

伊藤…一回で大丈夫ですか？

小山田…いや、まあ、それを超えるときは、うどんにしたりね。全員…わはははは。

小山田…公文教室の後の、スタッフの賄いをつくると、近所のアーティストも、みな食べにくる。そういうのに、届いた米が使われたり、親もそれを見越して野菜をドンと送ってくれたりとかしてくるから、すっごい助かってるねん。ただ、できるだけ地元の商店も使いたい。ちようどお向かいにすごい肉屋さんがあるんけど、その肉屋さんは鹿児島島の牛豚を一頭買いで、捌いて、祇園のお店に卸すような肉屋で、すっごい美味しいねん。その大将とはめっちゃ仲良くなつて、買いに行くと、値段の倍ぐらいのものが入つてたりするんよ。ベーコンとかもう、なんかそういうのを使つたりとかしていくと、関係がいいよね。

草椰…そうですね、すごく安心しますね。

羊屋…うん、うん。

小山田…うん。で、肉屋、向いやからさ、大将がこっちでみんなが肉食べたりしてるのみて、親指立ててくる。ぐっと。

草椰…お向かい同士でね。わ、いいわ、それ。

伊藤…完全に、大将の自己肯定感を上げまくってるよね。

草椰…またサービスしよう、つてなりますよ。

小山田…そうそうそう、もうお互いにグルグルグル循環するんやけど。草椰…好循環だわ。

羊屋…さつき散歩中に寄つたおそば屋さん。甲子さんね。閉店しちゃうの残念なんですけどね。閉店セールで、お店で使っていた器を売って、何回か行ってますけど、会話していると親密感とか深まりが一回ごとに違いますよね、やっぱり。

草椰…なんかね、すごくほぐれていくみたい。

小山田…うん。

羊屋…いっしょに甲子さんを吊っている気がするし。そう。これ、いただいたんですよ。名前入り。

伊藤…お盆代わりしてるけど、おそばの出前のふただね。

羊屋…どうして仲良くなると閉店しちゃうんだろ。江古田め。



甲子さんから譲り受けた蕎麦桶のふた



小山田徹さん、甲子のおふたり、羊屋白玉

【東京スープとブランケット紀行】とは

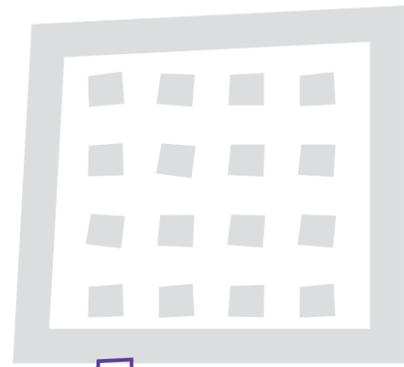
statement: ディレクター羊屋白玉の言葉

わたしにとって東京は、とつても長いこと、未来都市だった。今は、遺跡の街を歩いているように思う。どちらも美しい調べだが、組曲「東京」の楽譜は、いまや、生活者であるわたし、演奏者であるわたし、が追いつかないほどの加速記号でいっぱいだ。この楽譜に、泉のような小休符をいくつか、記したい。

project: 東京(住)+スープ(食)+ブランケット(衣)+紀行(徴)

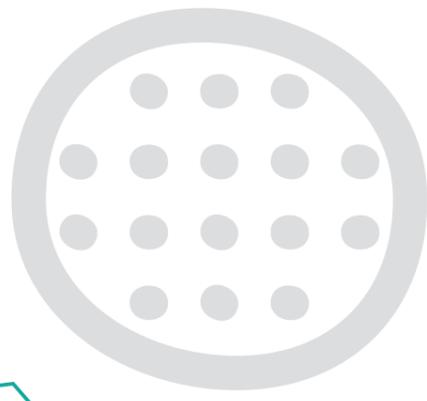
生活に関わるささやかなテーマ。そのいくつかを同時進行で取り扱ってゆくと、各テーマが影響し合い、分裂と統一を繰り返しながら、やがて大きなひとつのテーマに辿りつく。その最初のいくつかのテーマがこの4つです。

この4つのプロジェクトが、転がりながらも成就する時、わたしたちの現前に広がる世界が一瞬止まり、それまで費やしてきた時間のプロセスが立体的に問いかけてくる。そんなアートプロジェクトを目指しています。



東京 一箱

夢の一箱を、東京に転がす。



江古田 スープ

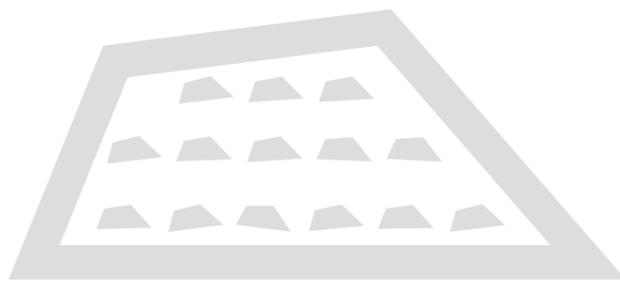
東京のラビリンスな交差点、江古田で迷う。

青ヶ島 ブランケット

青色のヤポネシアアイランドから、東京を眺める。

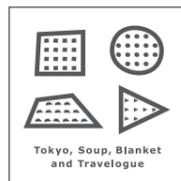
対談 紀行

転がしたり、迷ったり、眺めたり、そして、東京と話したい。



people: 運営しながら創作するわたしたち

ディレクター：羊屋白玉 アシスタントディレクター：伊藤馨 チーフアドミニストレーター：宮原清美
アシスタントアドミニストレーター：糸山裕子 齋藤優衣 デザイナー：草柳亮
テクニカルディレクター：糸山義則 フォトグラファー：中澤佑介



おわりに

最後まで読んでいただきありがとうございます。

後書きは、戦後フェミニズムの騎手であり、社会学者の上野千鶴子さんの言葉から始めたいと思います。

「なぜ、人間の生命を産み育て、その死をみとるといふ労働（再生産労働）が、その他のすべての労働の下位におかれるのか、という根源的な問題である。この問いが解かれるまでは、フェミニズムの課題は永遠に残るだろう。」

この言葉は、27年前の上野さんの著書、「家父長制と資本制」の巻末に書かれています。そして、今もなお、鮮烈に、そして痛みを伴う問いかけです。

アートプロジェクト（もしくはアート）と、と生活（労働や家事と言ってもいいかもしれない）の間で揺れ動く、「東京スープとブランケット紀行」の活動は、弔いや、繕いの個人的な記憶を、その声を、拾い集め、それらが静かに横たわる場をつくってゆくことなのかもしれない。と、収録したふたつの座談を通して、今、気付きました。

そして、その場合は、世の中のひとりひとりの中にすでにあり、安藤さんと小山田さんもそのひとりひとりなのですね。と、気付きました。

もしかしたら、近くに遠くに、そのひとりひとりはいるかもしれない。踏みとどまっている人も、もう飛び込んだ人も、飛び込んで溺れかけている人も。

そんな、ひとりひとりが集まって、いくつかの鍋や焚火を囲み、まああるくなって、ひとりひとりのはなしをするラウンドテーブルは、近い将来きつとできるだろう。と、悲願を込めて記します。

わたしはいつでもどこでもだいじょうぶです。

「東京スープとブランケット紀行」ディレクター 羊屋白玉

出典：上野千鶴子（1990）「家父長制と資本制」マルクス主義フェミニズムの地平 岩波書店

江古田コンパのカクテル「江古田の夜」と羊屋白玉

東京スープとブランケット紀行『お迎えの時』

発行：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

監修：羊屋白玉
編集：伊藤馨 宮原清美 齋藤優衣
写真：中澤佑介 阿部健一
デザイン：草柳亮
イラスト：鈴木まど香、羊屋白玉

印刷：グラフィック
発行日：2017年（平成29年）3月22日

本書に関するお問合せ先
東京スープとブランケット紀行
web <http://soupblanket.asia/>
e-mail sec@soupblanket.asia

© 一般社団法人指輪ホテル
© アーツカウンシル東京

「東京アートポイント計画」とは

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス8階
TEL 03-6256-8430 FAX 03-6256-8827
<http://www.artscouncil-tokyo.jp>

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人指輪ホテル





東京スープとブランケット紀行『お迎えの時』(非売品)

ARTS COUNCIL TOKYO 